

数学・理科の学習に対する生徒の意識 —TIMSS2011質問紙調査結果から—

◆国際平均に比べて、日本の中学生は学習の楽しさや実社会との連関に対して肯定的な回答をする割合が低いなど、学習意欲面で課題がある。

※ 生徒質問紙調査(対象:中学校2年生)において、下記項目につき、「強くそう思う」、「そう思う」と回答した生徒の割合の合計

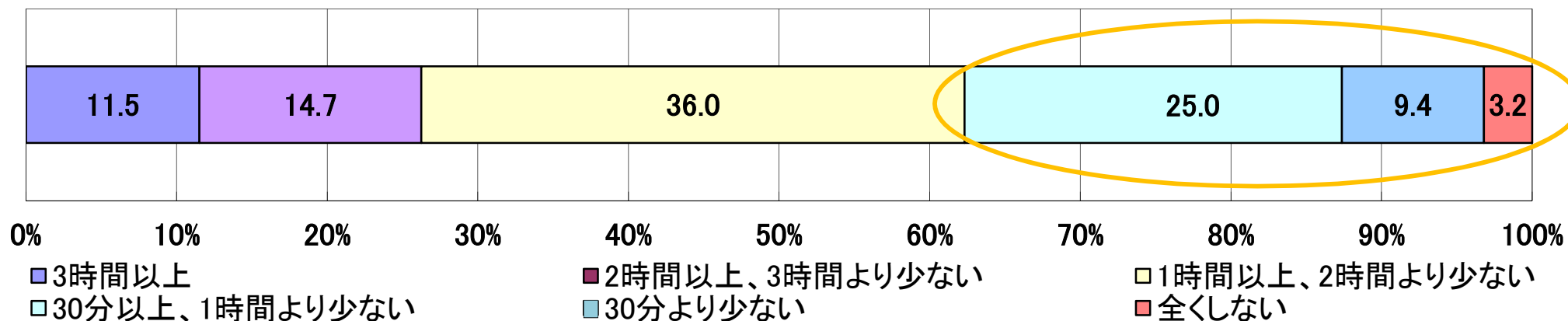
	数学		理科	
	日本	国際平均	日本	国際平均
数学・理科の勉強は楽しい	48%	71%	63%	80%
数学・理科を勉強すると日常生活に役立つ	71%	89%	57%	83%
他教科を勉強するために数学・理科が必要	67%	81%	35%	70%
志望大学に入るために良い成績が必要	72%	85%	59%	77%
将来望む仕事につくために良い成績が必要	62%	83%	47%	70%
数学・理科を使うことが含まれる職業につきたい	18%	52%	20%	56%

(出典) IEA国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2011) 質問紙調査結果より文部科学省作成

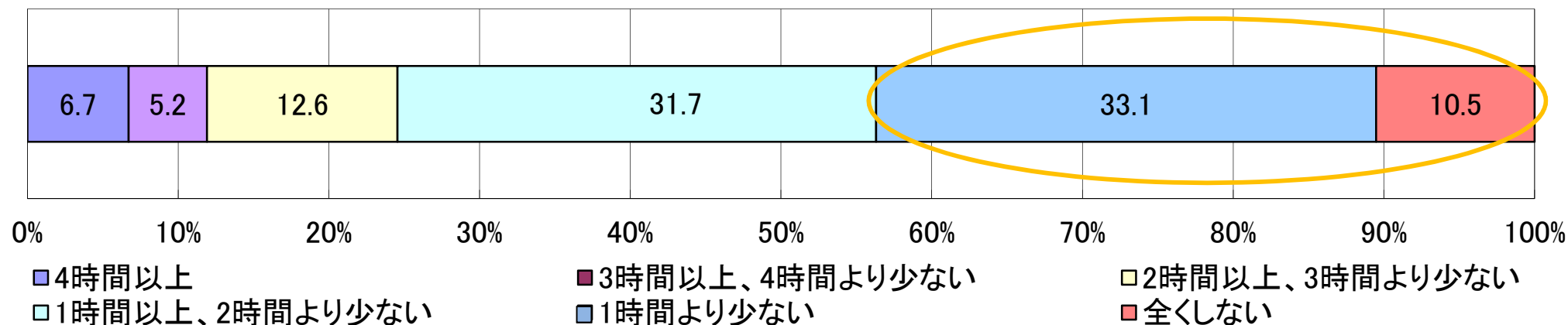
学習習慣（小学6年生）

普段、学校外での学習時間が1時間未満の児童の割合は38%。

学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか



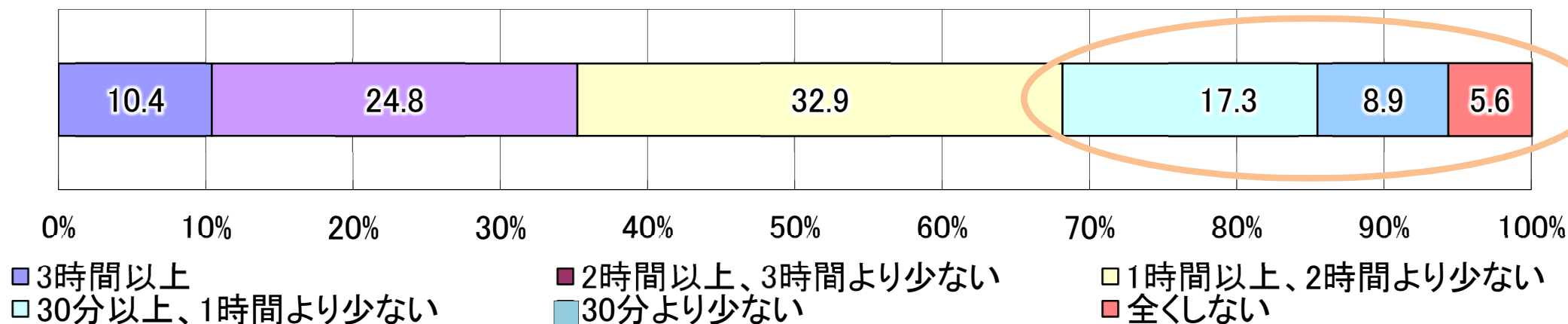
土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか



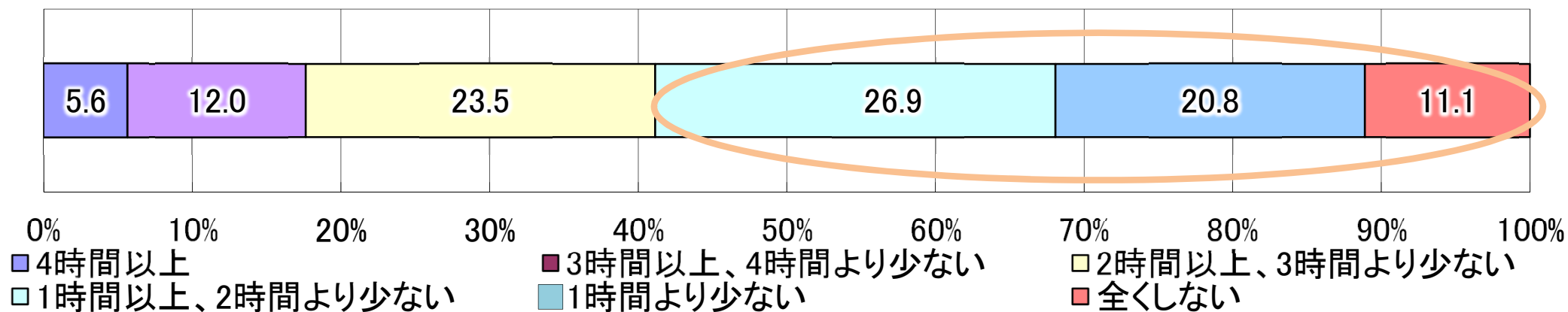
学習習慣（中学3年生）

普段、学校外での学習時間が1時間未満の生徒の割合は40%。

学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか



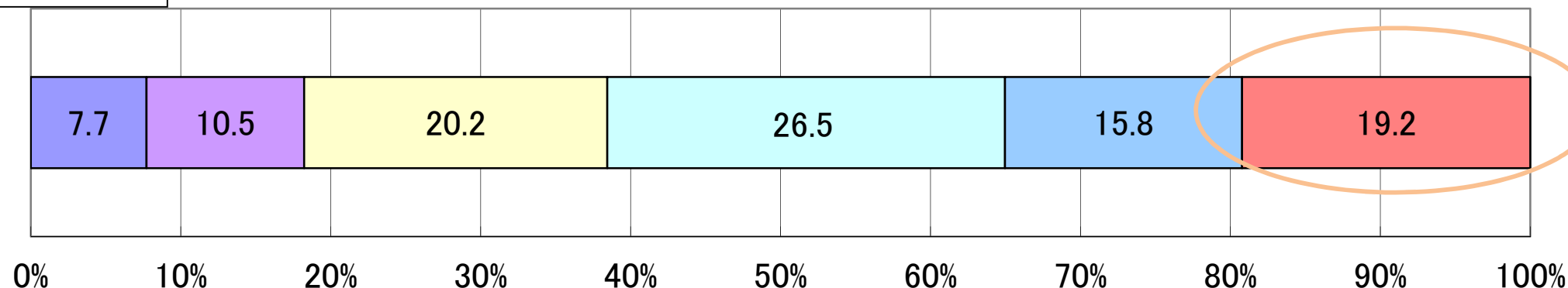
土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか



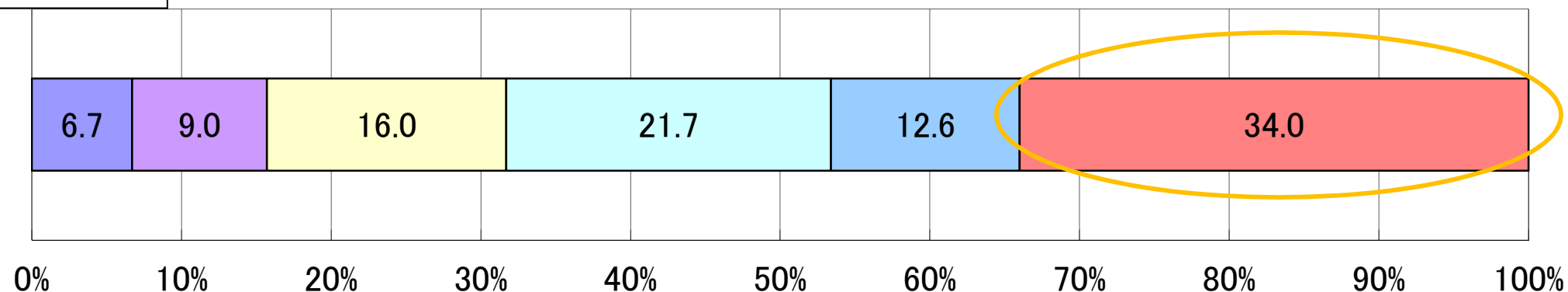
読書習慣

普段、全く読書をしない生徒は3割超。

小学6年生 学校の授業時間以外に、普段、一日あたりどれくらいの時間、読書をしますか



中学3年生

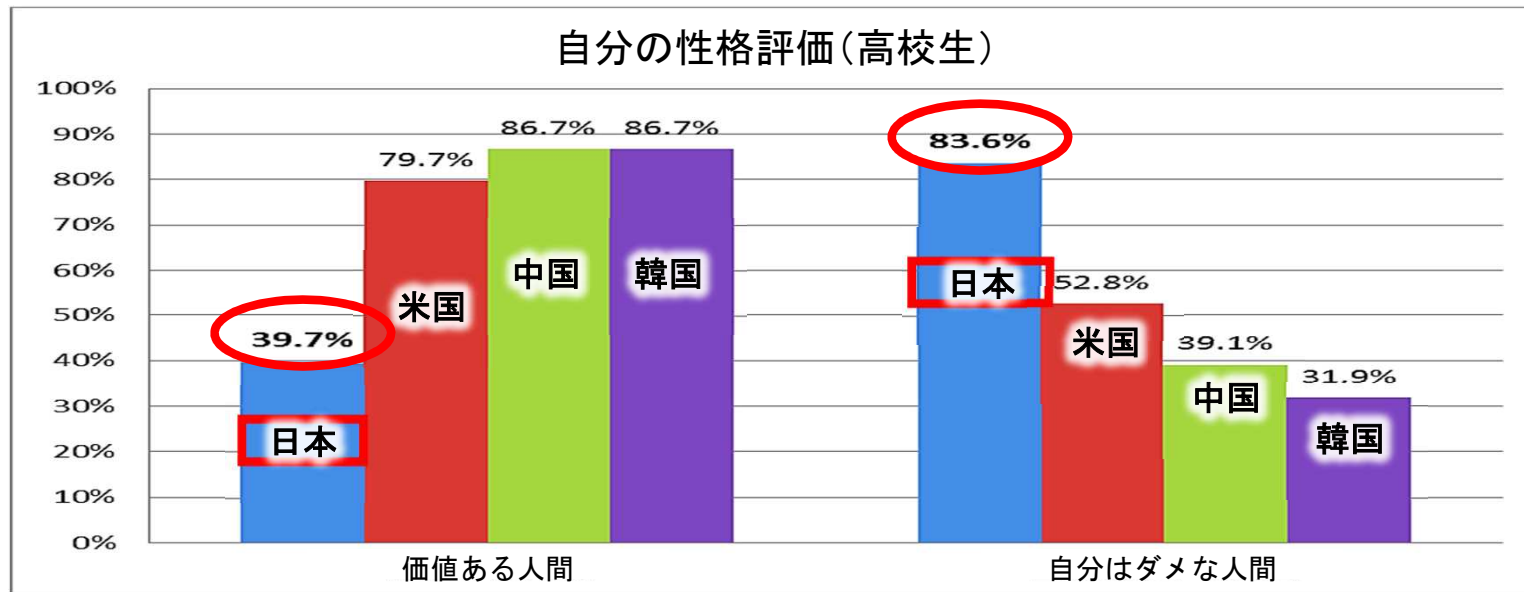


■ 2時間以上
■ 30分以上、1時間より少ない
■ 10分より少ない

■ 1時間以上、2時間より少ない
■ 10分以上、30分より少ない
■ 全くしない

生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識

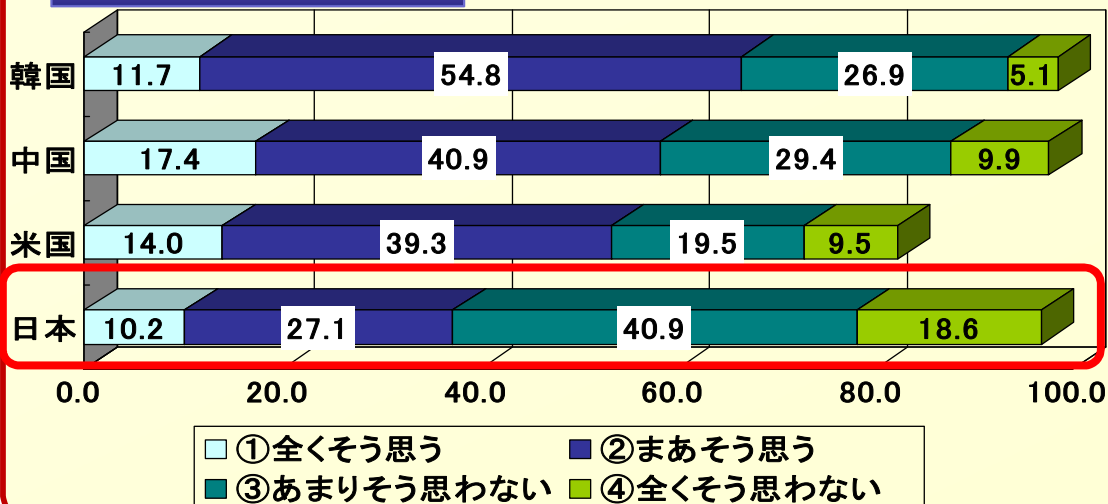
◆米中韓の生徒に比べ、日本の生徒は、「自分を価値ある人間だ」という自尊心を持っている割合が半分以下、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という意識も低い。



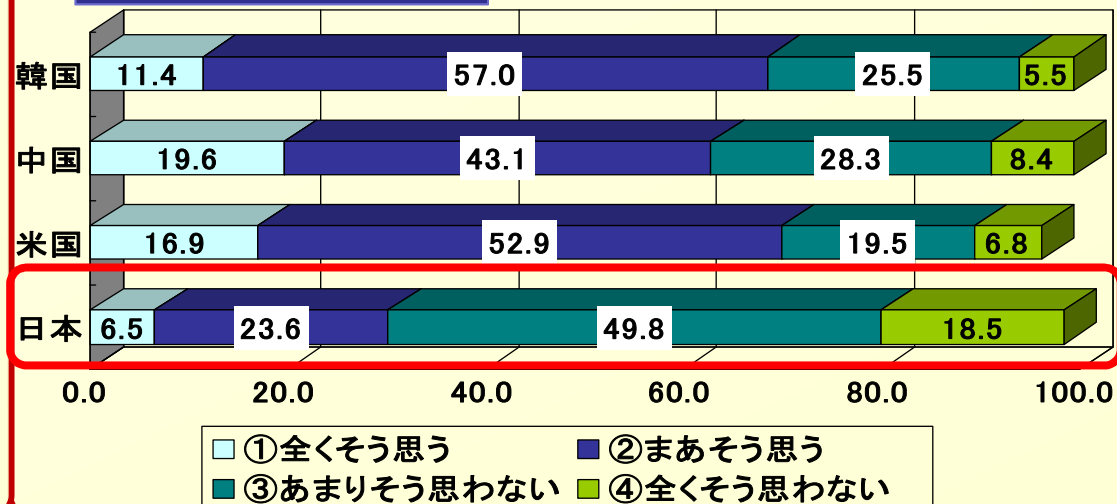
(出典)
 (財) 一ツ橋文芸教育振興会、
 (財) 日本青少年研究所
 「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書」(2012年4月)より
 文部科学省作成

【問33-2】私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

中学生



高校生



(出典) (財) 一ツ橋文芸教育振興協会、(財) 日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較 - (2009年2月)」より文部科学省作成

規範等に関する青少年の意識

◆日本の若者は、他人に迷惑をかけてはならないという意識は相対的に高いが、積極的に困っている人を助けることの意識やボランティア活動への興味はやや低いというデータがある。

(出典)内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(平成25年度実施)より

※各国13歳から29歳までの男女が対象。

「他人に迷惑をかけなければ、何をしようと個人の自由だ」
(そう思う、どちらかと言えばそう思うの合計%)

「困っている人を見たら、頼まれなくても助けてあげるべきだ」
(そう思う・どちらかと言えばそう思うの合計%)

ボランティア活動に興味があるか
(「ある」という回答の割合%)

■ そう思う ■ どちらかと言えばそう思う

■ そう思う ■ どちらかと言えばそう思う

■ 興味がある

日本(n=1175) 12.3 29.4 42

日本(n=1175) 21.6 52.4 74

日本(n=1175) 35.1

韓国(n=1026) 37.1 41.5 79

韓国(n=1026) 19.8 47.1 66.9

韓国(n=1026) 56.9

アメリカ(n=1036) 38.5 37 76

アメリカ(n=1036) 45 38.2 83.2

アメリカ(n=1036) 61.1

英国(n=1078) 39.3 41.7 81

英国(n=1078) 37.2 42.9 80.1

英国(n=1078) 50.6

ドイツ(n=1034) 34.1 40.2 74

ドイツ(n=1034) 40.1 42.2 82.3

ドイツ(n=1034) 50.4

フランス(n=1006) 46.9 40.4 87

フランス(n=1006) 24.3 47.3 71.6

フランス(n=1006) 42.6

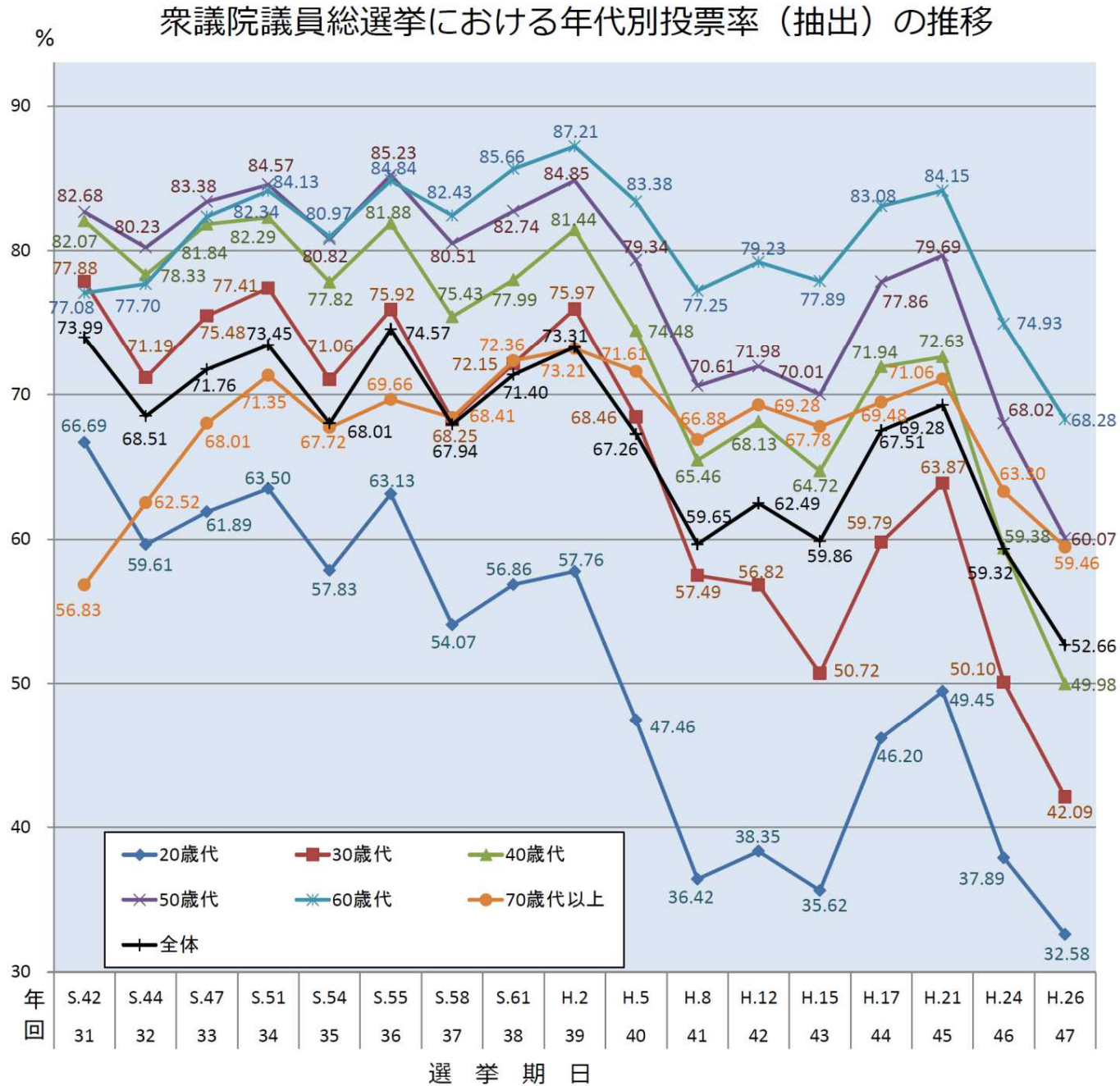
スウェーデン(n=1076) 39 38.2 77

スウェーデン(n=1076) 24 46 70

スウェーデン(n=1076) 42.8

社会参画等に関する若者の意識（投票率の低下）

◆直近の衆議院議員総選挙（H26.12）の20歳代の投票率（32.58%）は、60歳代の投票率（68.28%）の半分以下。



キャリア教育の学習に係る体験的な学習機会について

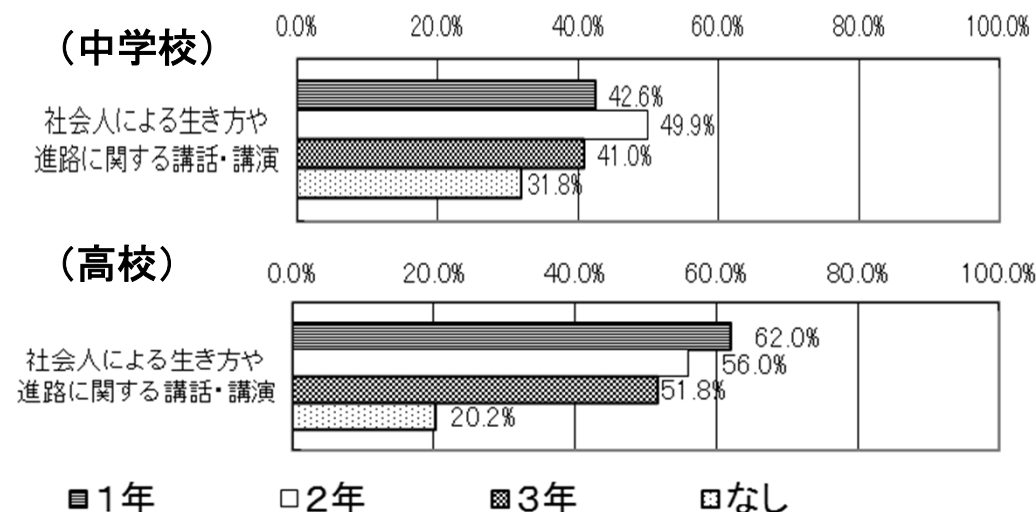
- 在学中にインターンシップを体験した生徒の割合は増加傾向にあるものの、普通科生徒の体験した割合については低水準にとどまっている。
- 「社会人による生き方や進路に関する講話・講演」の実施率は中学校では68.2%、高等学校では79.8%となっている。

<在学中にインターンシップを体験した生徒の割合>

	公立高等学校			
	全体	普通科	職業に関する学科	総合学科
H15年	17.5	6.7	45.6	—
H20年	28.3	15.2	63.7	44.1
H25年	31.5	18.6	66.4	45.3

資料: 国立教育政策研究所生徒指導研究センターの公表資料を基に作成

<社会人講話の実施状況>



資料: キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書(平成25年3月)

●産業競争力会議(雇用・人材・教育WG)における指摘

(学校における取組)

- 社会人講話について、中学校では68.2%、高校では69.8%の実施率であるが、量的・質的にも拡大していくべき。
- 職場体験活動について実施率は非常に高いが、1回限りではなく頻度も増やしていくことが大切ではないか。
- 中学校での職場体験活動、高校でのインターンシップ等について、取組が進んでいるが、更に拡大していく必要。

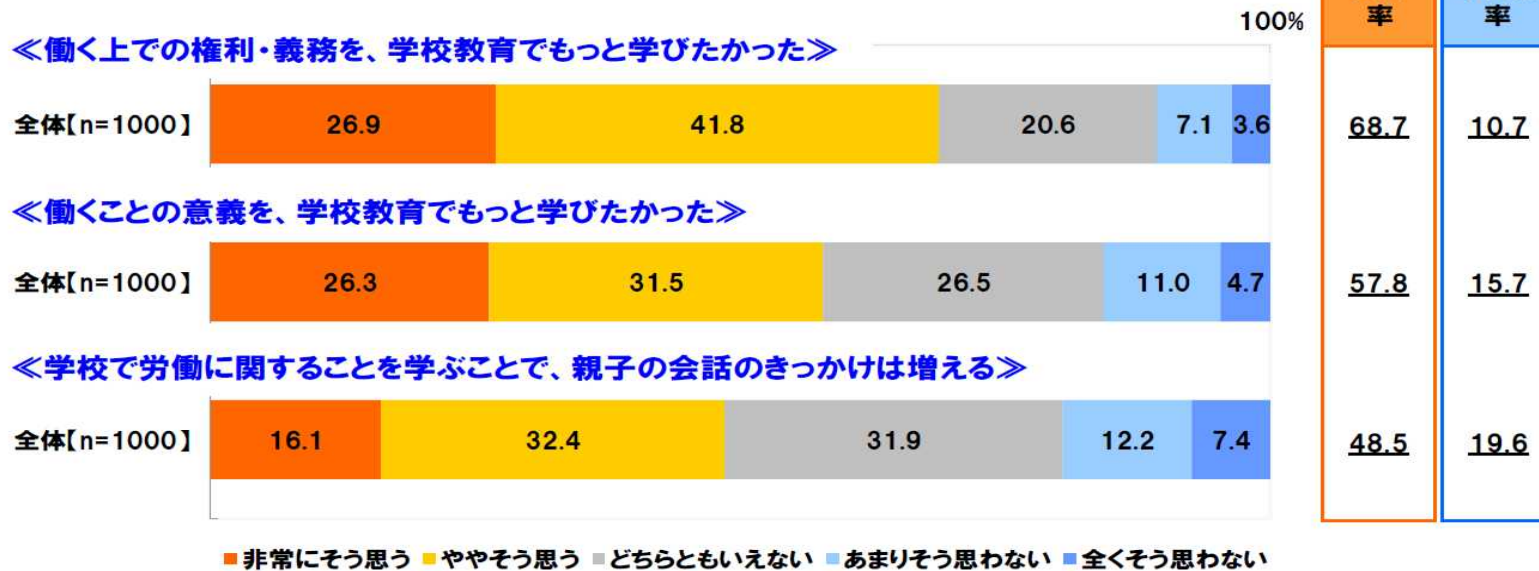
(教育委員界等における取組)

- 教育委員会や学校等におけるキャリア教育の推進体制の整備のため、学校等の教育機関と地域・産業界が参画する協議会の設置促進、キャリア教育を推進するコーディネーター等の多様な人材の配置促進が必要。

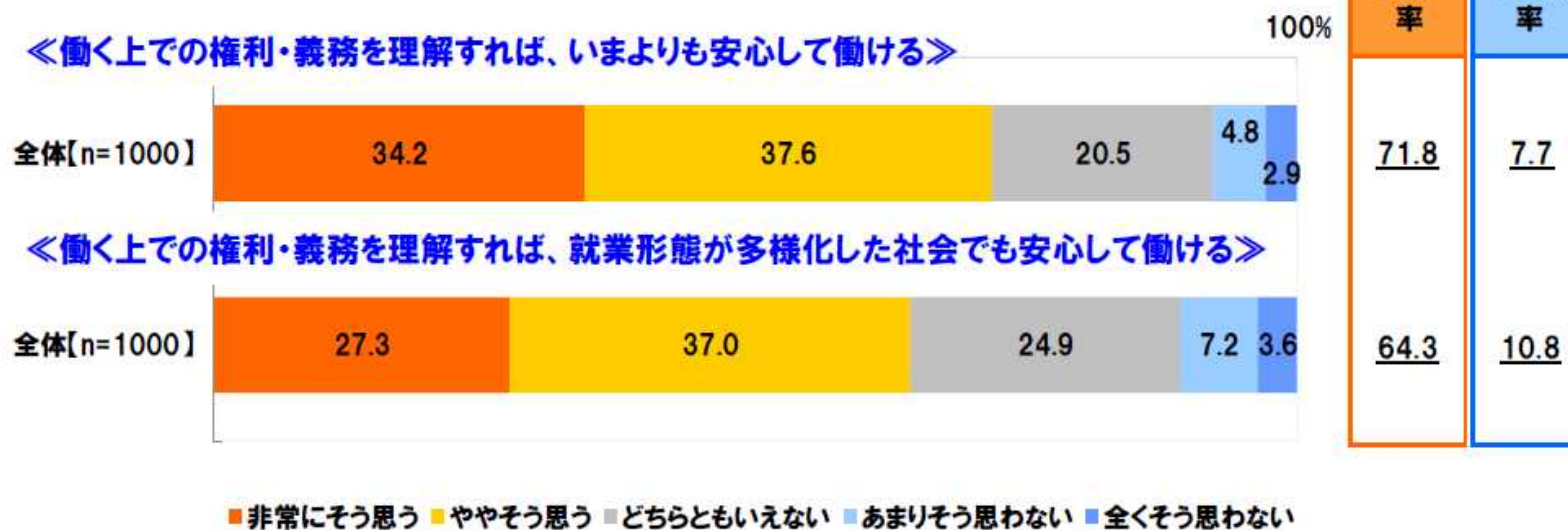
若年層就労者の意識

◆若年層の就労者の多くは、働く上での権利・義務や働くことの意義を学ぶことが大切だと考えている。

◆労働教育に関する意識(各単一回答形式)



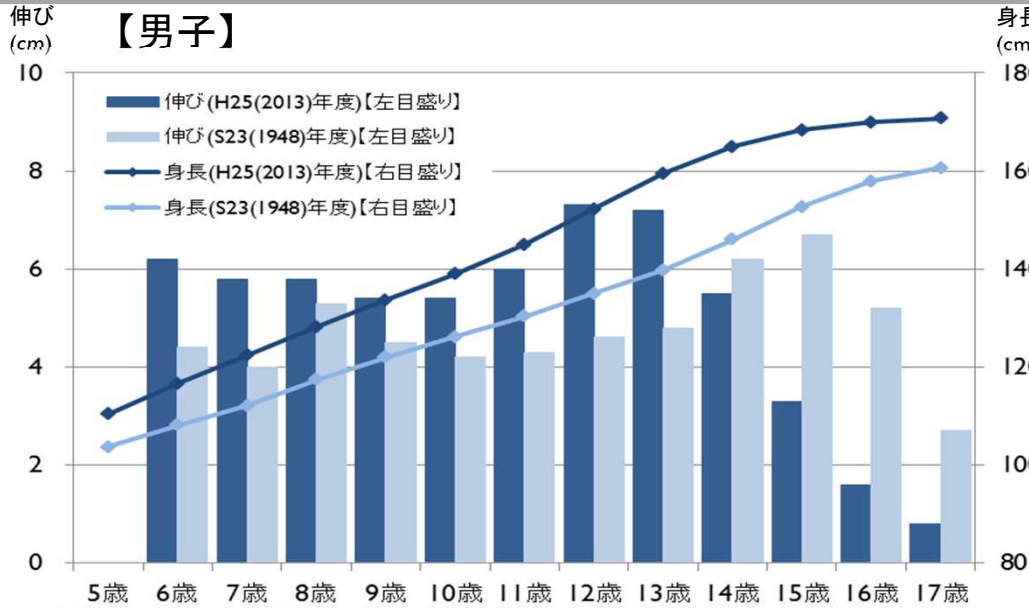
◆仕事に対する意識(各単一回答形式)



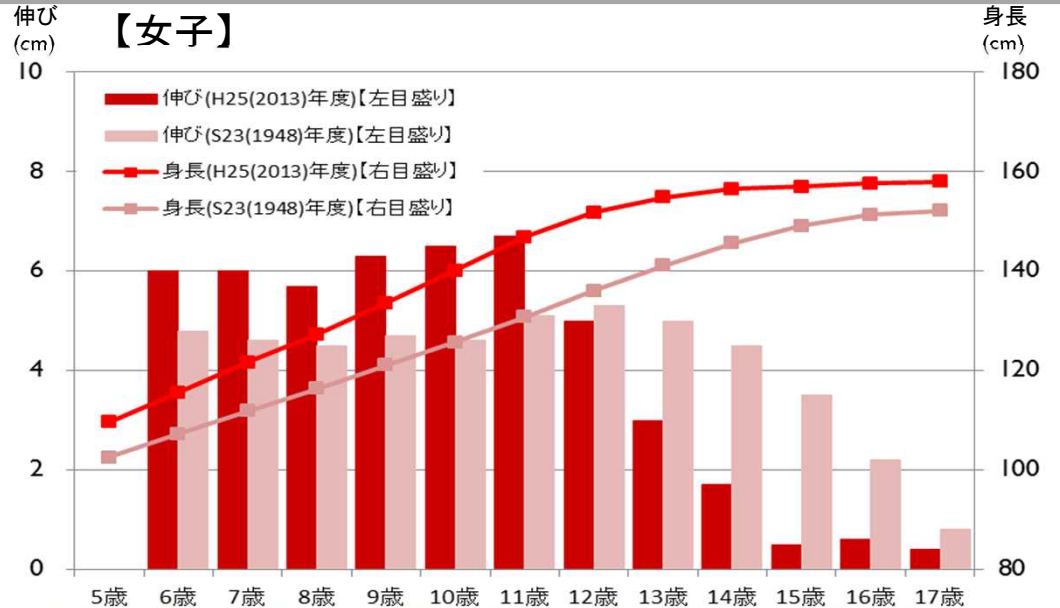
日本労働組合総連合会
「学校教育における『労働教育』に関する調査」
モバイルリサーチ(携帯電話によるインターネットリサーチ)により、2014年10月3日～10月8日の6日間において実施し、現在就業中の18歳～25歳の男女(アルバイト学生は除く)1,000名の有効サンプルを集計。
(調査協力機関: ネットエイジア株式会社)

男女児童の身長・体重平均値の推移

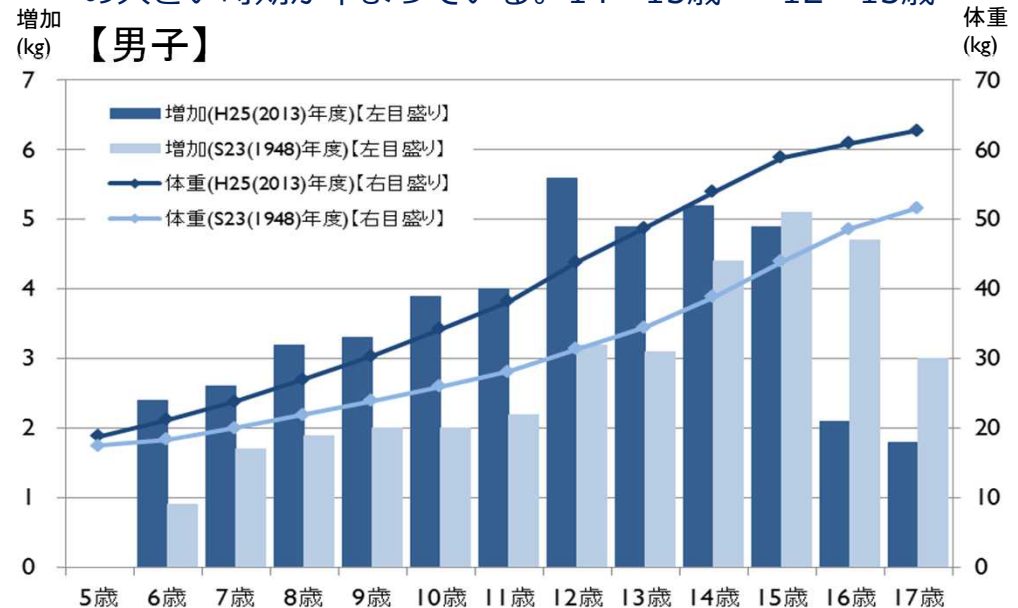
◆子供の身体的成長(身長・体重)は幼児期から約2歳早くなっている。



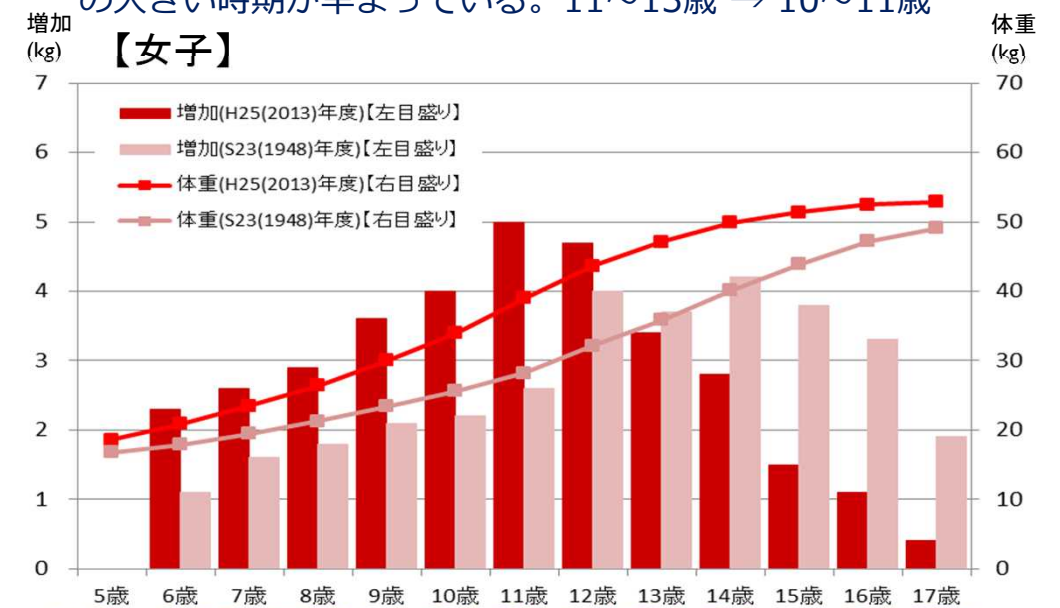
男子：昭23と平25との間の変化を比較すると、身長の伸びの大きい時期が早まっている。14～15歳 → 12～13歳



女子：昭23と平25との間の変化を比較すると、身長の伸びの大きい時期が早まっている。11～13歳 → 10～11歳



男子：昭23と平25との間の変化を比較すると、体重の伸びの大きい時期が早まっている。14～16歳 → 12～15歳



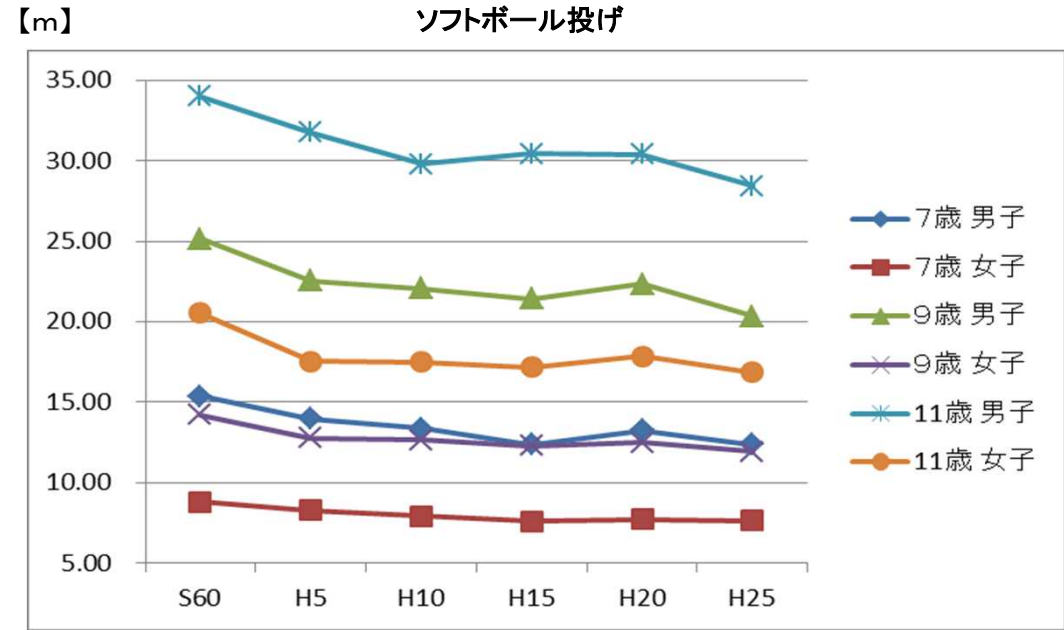
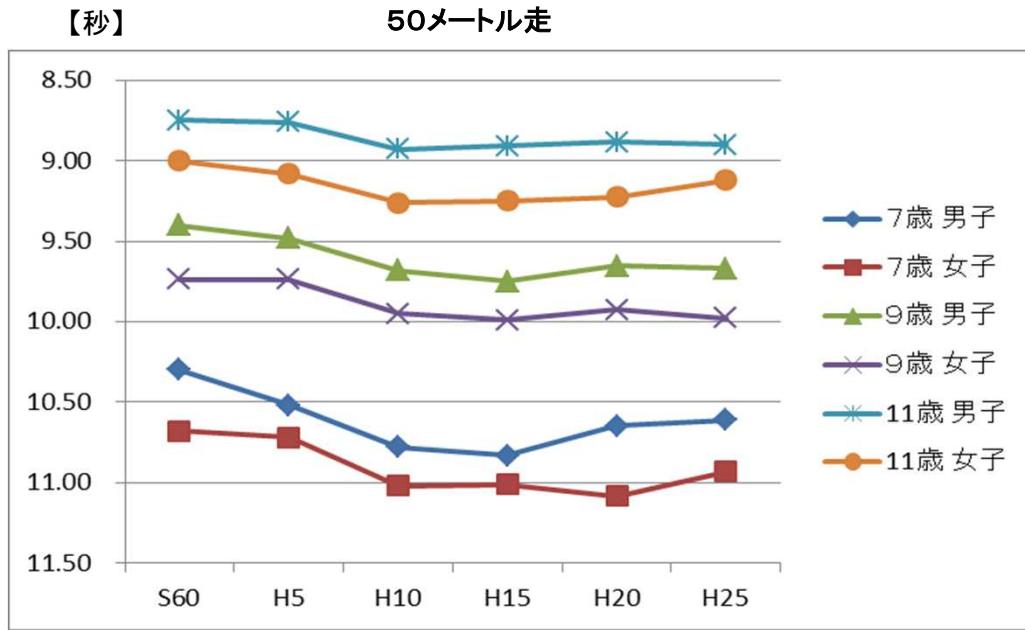
女子：昭23と平25との間の変化を比較すると、体重の伸びの大きい時期が早まっている。12～15歳 → 11～12歳

(出典) 昭和23年(1948)度 及び 平成25年(2013)度 学校保健統計調査より

子供の体力・運動能力の年次推移

◆子供の体力は、昭和60年頃と比較すると依然として低い水準で推移している。

○年次推移



【年度】

	S60	H5	H10	H15	H20	H25
7歳男子	10.30	10.52	10.78	10.83	10.65	10.61
7歳女子	10.68	10.72	11.02	11.01	11.08	10.93
9歳男子	9.40	9.48	9.68	9.75	9.65	9.67
9歳女子	9.74	9.74	9.95	9.99	9.93	9.98
11歳男子	8.75	8.76	8.93	8.91	8.88	8.90
11歳女子	9.00	9.08	9.26	9.25	9.23	9.12

【年度】

	S60	H5	H10	H15	H20	H25
7歳男子	15.37	13.96	13.36	12.37	13.25	12.38
7歳女子	8.80	8.27	7.94	7.61	7.73	7.64
9歳男子	25.13	22.52	22.06	21.42	22.33	20.33
9歳女子	14.22	12.77	12.64	12.31	12.50	11.92
11歳男子	33.98	31.73	29.77	30.42	30.37	28.41
11歳女子	20.52	17.55	17.49	17.19	17.87	16.85

親の世代と子の世代の体力・運動能力の比較

◆親の世代と比べて、身長、体重など子供の体格は向上しているが、体力・運動能力は依然低い水準。

○親の世代(30年前)との比較

<体格>

身長(cm)

	S58	H25
男子(11歳)	143.1	145.0
女子(11歳)	145.2	146.8

体重(kg)

	S58	H25
男子(11歳)	36.5	38.3
女子(11歳)	37.7	39.0

<テスト結果>

50m走(秒)

	S58	H25
男子(11歳)	8.70	8.90
女子(11歳)	8.98	9.12

ソフトボール投げ(m)

	S58	H25
男子(11歳)	34.47	28.41
女子(11歳)	20.47	16.85

(出典) 文部科学省「平成25年度体力・運動能力調査」

握力(kg)

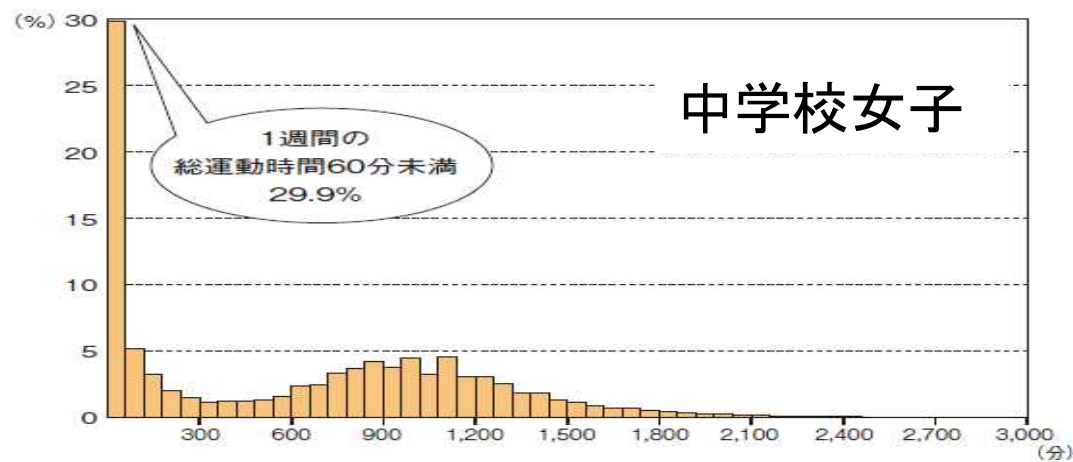
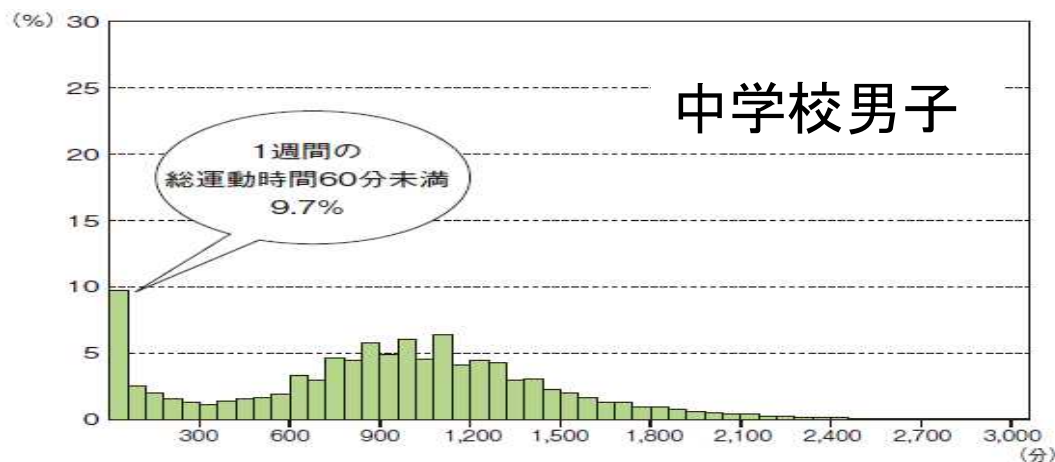
	S58	H25
男子(11歳)	21.60	20.04
女子(11歳)	19.81	19.74

反復横とび(回)

	S58	H25
男子(11歳)	42.65	45.79
女子(11歳)	40.50	43.02

※反復横とびは上昇している

◆運動する子供としない子供が二極化している。



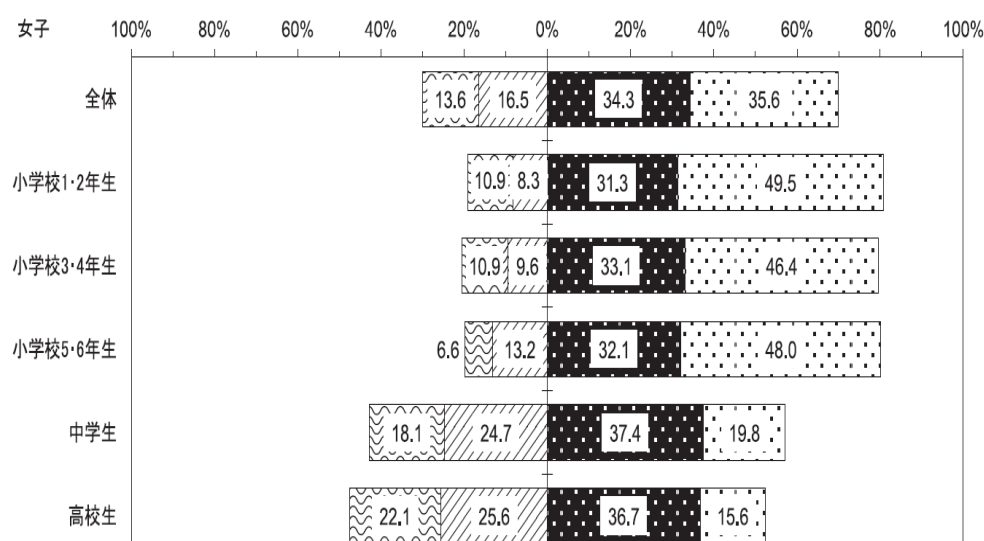
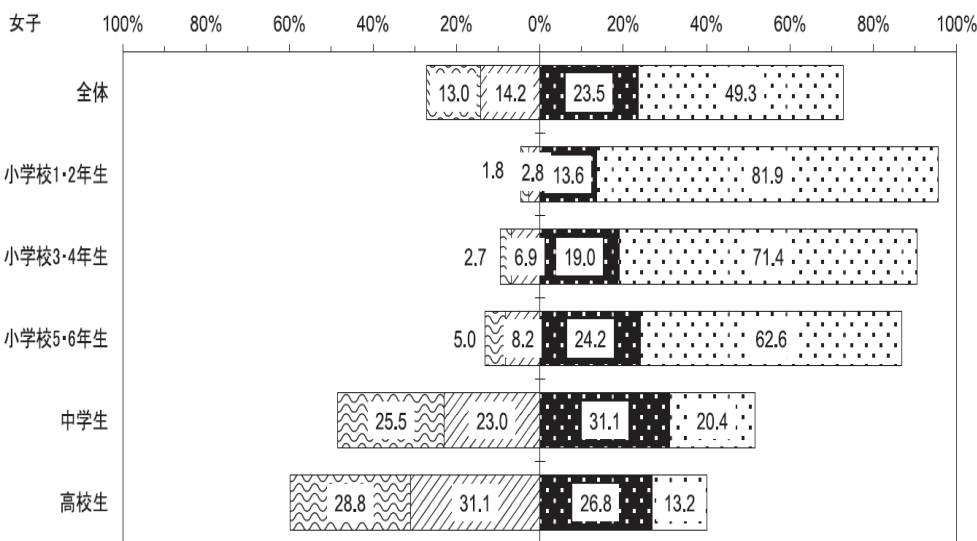
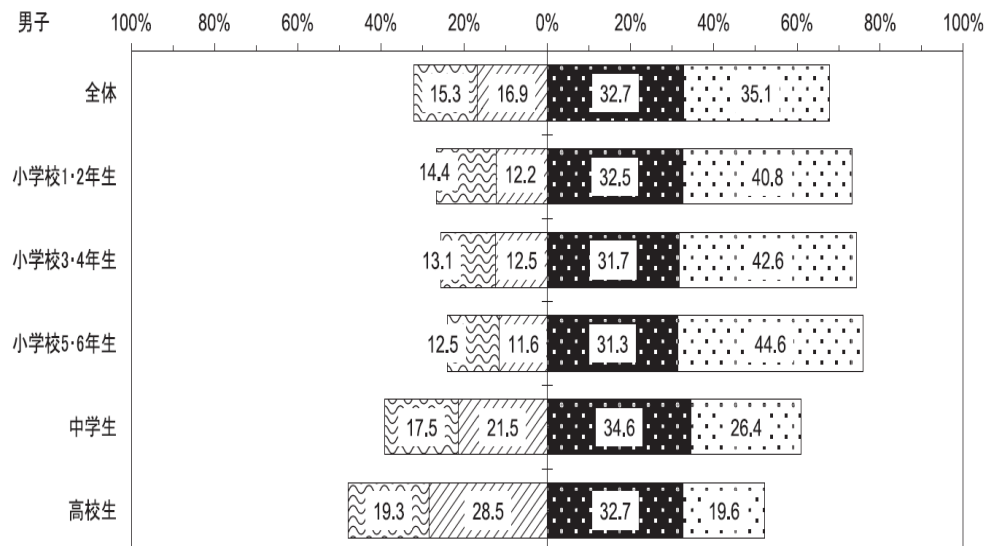
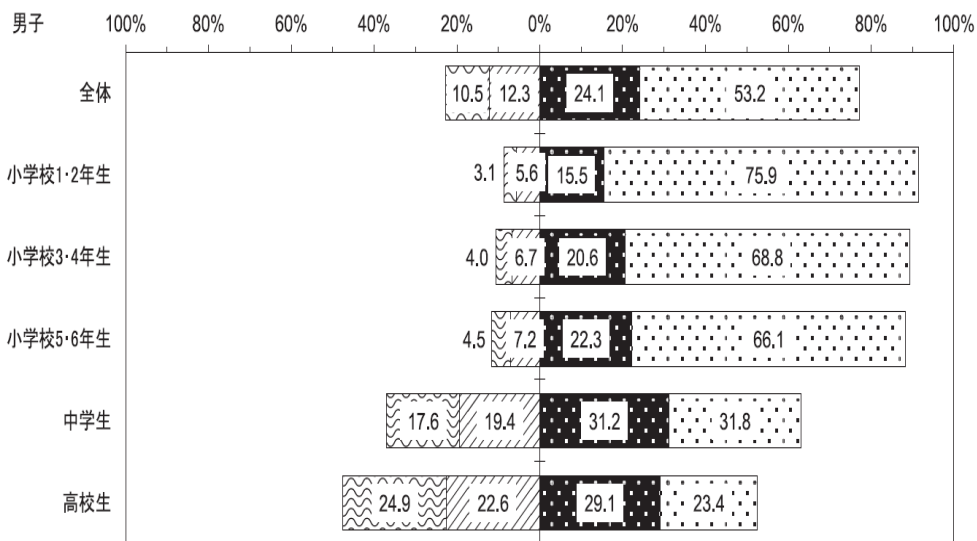
(出典) 文部科学省「平成25年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」 32

児童生徒のメンタルヘルス

メンタルヘルスの自覚症状については中学生→高校生と上がるにつれて高く、男子より女子のほうが高いことが示されている。

気分の落ち込みのせいで、何もする気にならないことがある

集中したり、すばやく考えたりできないことがある



□ しばしば(一週間に一度程度)感じている □ ときどき(一か月に一度程度)感じている
 ■ たまに(それ未満)感じている □ 感じていない

□ しばしば(一週間に一度程度)感じている □ ときどき(一か月に一度程度)感じている
 ■ たまに(それ未満)感じている □ 感じていない

英語教育の実施状況について

■生徒の英語力について、目標としている英語力を達成している生徒は公立中学校3年生で約32%、公立高校3年生で約31%。

- 中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。（英検であれば3級程度以上）
- 高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。（英検であれば準2級～2級程度以上）

■英語教員の英語力についても、目標を達成している教員は、公立中・高それぞれ約28%及び約53%。

- 生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場とすることができる。（英検準1級以上、TOEFLのPBT550点以上、CBT213点以上、iBT80点以上またはTOEIC730点以上）

■授業中、発話を半分以上英語で行っている英語教員は、公立中学校3年生担当で約41%、公立高校3年生（コミュニケーション英語Ⅰ）担当で約53%。

■「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は、公立中・高それぞれ約17%及び約34%。

- 「CAN-DOリスト」とは、英語を使って実際にどのようなことができるようになるのか、その能力を記述したものを指す。

（出典）文部科学省「平成25年度 英語教育実施状況調査」より

平成26年度 英語力調査結果（高校3年生）の速報（概要）

調査の目的・対象

- 第2期教育振興基本計画（平成25～29年度）に、グローバル人材の育成に向けた取組として、外部試験団体と連携した生徒の英語力の把握・検証による戦略的な英語教育改善の取組支援を提言。また、成果指標として、高3生の英語力の目標を設定（卒業時に英検準2～2級程度以上）。
- 全国の高校3年生約7万人（国公立約480校）を対象に、英語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）がバランスよく育成されているかという観点から、生徒の英語力を測るとともに、英語の学習状況を把握・分析。
(ただし、「話すこと」は1校あたり1クラス40人程度を対象)
(試験実施時期：平成26年7月～9月)
- 調査結果を学校での指導や生徒の学習状況の改善・充実に活用。

〈調査の特徴〉

※平成26年度は旧学習指導要領で学んだ高3生を対象とした調査。平成27年度は新学習指導要領で学んだ生徒の調査を実施し、経年比較を行う予定。

※高校生の英語力を幅広く測定するため、生徒の一定の学習達成度ではなく、世界標準となっているCEFR（Common European Framework of Reference：ヨーロッパ言語共通参照枠）のA1からB2までのレベルを測定できるように設計。（別紙参照）

※国による全国無作為抽出で行う大規模な4技能型試験の初めてのフィージビリティ調査。

調査結果における「課題」と今後の「改善の方向性」

4技能の全てにおいて課題があるとともに、特に「話すこと」「書くこと」について課題が大きい。

【英語学習に対する生徒の意識】

〈課題〉

- 英語の学習が好きではないとの回答が半数以上。
- 将来の生活において英語を活用するイメージを持つ生徒は少ない。
- 一方で、4技能とも試験結果が高いほど「英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい」「大学で専攻する学問を英語で学べるようになりたい」と回答した生徒が多い。

〈改善の方向性〉

⇒生徒が「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、主体的に学ぶ意欲や態度の育成を含めた具体的な指標形式の目標の設定、総合的なコミュニケーション能力を育成するための言語活動及び多面的な評価方法の在り方を検討し、改善することが必要。

【4技能を活用した言語活動に対する生徒の意識】

〈課題〉

- 英語を用いて「生徒同士で話し合う、意見交換を行う」ことや、「スピーチやプレゼンテーション」をした経験が少ない。
- 一方で、「話すこと」の試験結果が高いほど、「生徒同士で英語で話し合う、意見交換、スピーチ、プレゼンテーションをしていると思う」生徒の比率が高い。

〈改善の方向性〉

⇒英語の基礎的な知識・技術を活用し、生徒の興味・関心が高い話題や、時事問題や社会的な話題などについて「発表・討論・交渉」などを行う言語活動を豊富に体験させ、情報や考えなどを的確に理解するとともに適切に伝えられる総合的なコミュニケーション能力を高めることが必要。

生徒全体の英語力の傾向

- 「読むこと」「聞くこと」は、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）A1上位からA2下位レベルに集中。
- 「書くこと」の得点者は全体の約70%（無回答：29.2%）、「話すこと」の得点者は全体の約85%（無回答：13.3%）となっており、課題が大きい。

【生徒全体のスコア分布】

<読むこと> 43問（約45分）

CEFR	得点	Reading	割合	
B2	320	77	0.2%	
	310	18		
	300	27		
B1	290	37	2.0%	
	280	69		
	270	82		
	260	107		
	250	157		
	240	195		
	230	317		
	220	420		
	210	561		
	200	778		
A2	190	1124	25.1%	
	180	1477		
	170	1956		
	160	2610		
	150	3545		
	140	5245		
	130	8192		
	120	11790		
A1	110	12508	72.7%	
	100	9796		
	90	4698		
	80	1823		
	70	604		
	60	208		
	50	76		
	40	51		
	30	19		
	20	2		
	10	0		
	0	285		
	平均	129.4		
	調査対象	68,854		

<聞くこと> 36問（約25分）

CEFR	得点	Listening	割合
B2	320	175	0.3%
B1	310	50	2.0%
	300	70	
	290	68	
	280	109	
	270	126	
	260	160	
	250	227	
	240	256	
	230	341	
	220	454	
A2	210	615	21.8%
	200	748	
	190	992	
	180	1241	
	170	1731	
	160	2199	
	150	2996	
	140	4034	
A1	130	5438	75.9%
	120	7684	
	110	8831	
	100	9026	
	90	7840	
	80	5782	
	70	3474	
	60	2125	
	50	920	
	40	396	
	30	189	
	20	106	
	10	99	
	0	352	
平均	120.3		
調査対象	68,854		

<書くこと> 2問（約25分）

CEFR	得点	Writing	割合	
B2	140	2	0.0%	
	135	0		
	130	3		
B1	125	7	0.7%	
	120	33		
	115	45		
	110	175		
	105	222		
	100	578		
	95	608		
A2	90	1,183	12.8%	
	85	946		
	80	1,804		
	75	1,736		
	70	1,971		
	65	1,816		
	60	2,347		
	55	1,978		
A1	50	2,516	86.5%	
	45	2,111		
	40	2,417		
	35	1,988		
	30	2,497		
	25	2,080		
	20	2,258		
	15	2,167		
	10	2,562		
	5	2,913		
	0	30,089		
	平均	27.2		
	調査対象	69,052		
	0点	20,139		29.2%

<話すこと> 3問（対面約10分）

CEFR	得点	Speaking	割合
B1	14	274	1.7%
A2	13	272	11.1%
	12	415	
	11	501	
	10	657	
A1	9	691	87.2%
	8	770	
	7	946	
	6	1185	
	5	1632	
	4	1105	
	3	1648	
	2	1450	
	1	2827	
	0	2210	
平均	4.5		
調査対象	16,583		
0点	2,210	13.3%	

※CEFRは、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力評価のために、透明性が高く分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表した。欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等・中等教育を通じた目標として適用されたり、言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられったりしている。本調査では、便宜上A1～B2レベルまでを得点帯刻みに設定し分布を把握。（別紙参照）

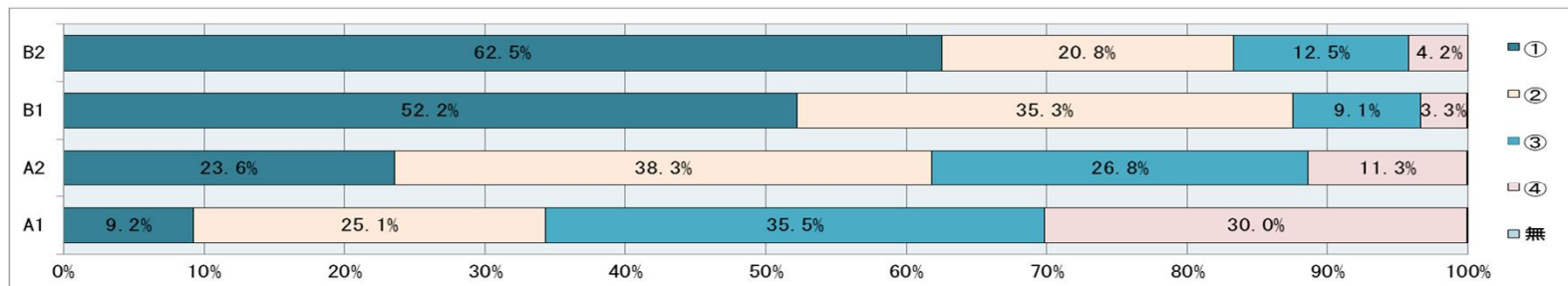
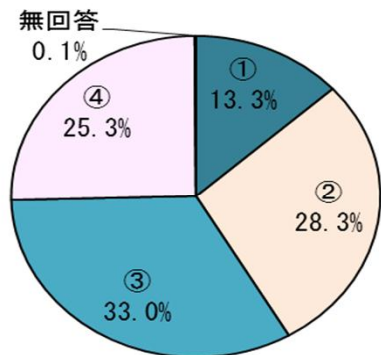
英語学習に対する生徒の意識

生徒の英語学習に対する意識

○ 英語が好きではない（選択肢③④）との回答が半数を上回る。特にA1レベルにおいて顕著（公立）。

問 英語の学習は好きですか。最も当てはまる選択肢を1つ選んでください。

- ① ① ② ③ ④



※「読むこと」の試験結果とのクロス。他の技能についても同様の傾向がみられる。

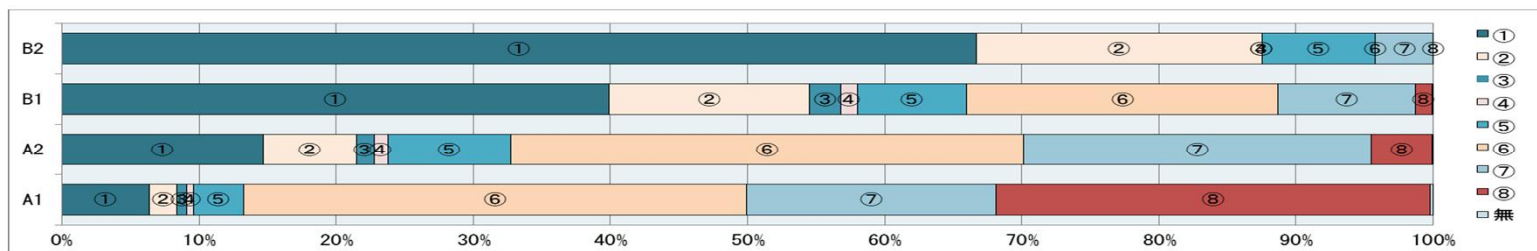
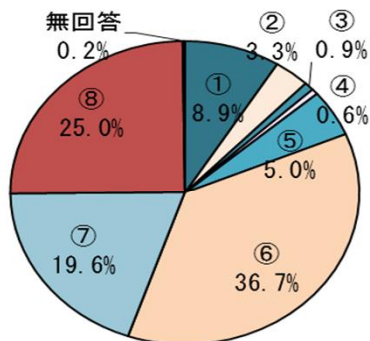
現在の英語力と将来の英語使用のイメージ

○ 現在の英語力のレベルによって将来の英語使用のイメージが異なる（公立）。

「英語をどの程度身に付けたいと思っていますか」という問いに対し、B2、B1など試験結果が高いほど、「英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい」（選択肢①）「大学で自分が専攻する学問を学べるようになりたい」（選択肢②）といった回答が多い。

問 どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか。最も当てはまるものを1つ選んでください。

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧



※「読むこと」の試験結果とのクロス。他の技能についても同様の傾向がみられる。

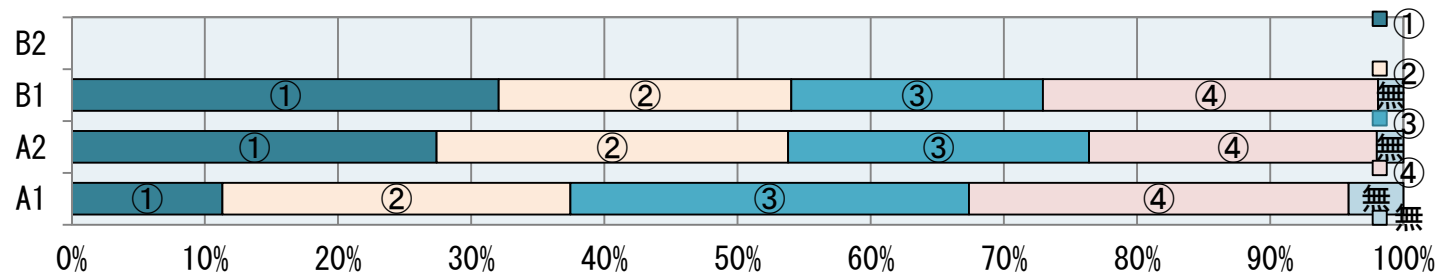
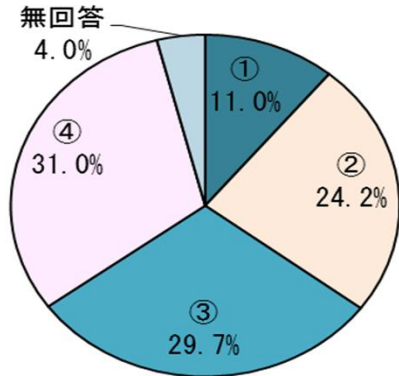
4技能を通じた言語活動に対する意識

4技能を通じた言語活動に対する生徒の意識

- 聞いたり読んだりしたことについて、英語で話し合ったり意見交換をした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思う」(選択肢①②) 生徒の比率が高い (公立)。

問 第2学年での英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか。

- ① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない



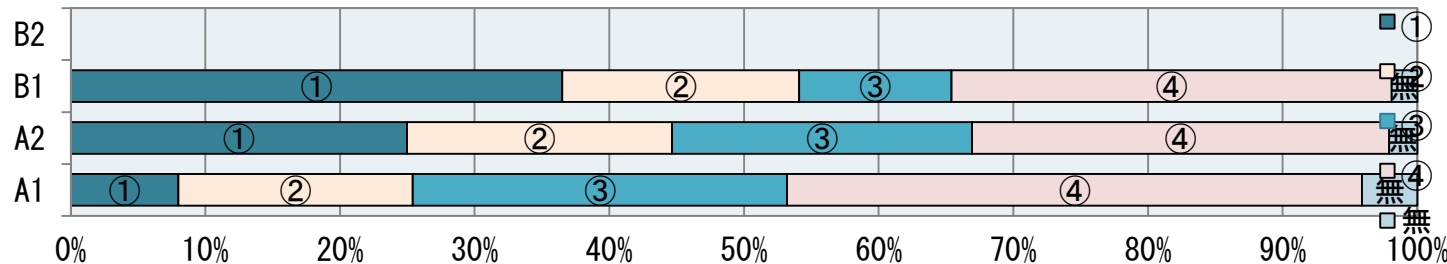
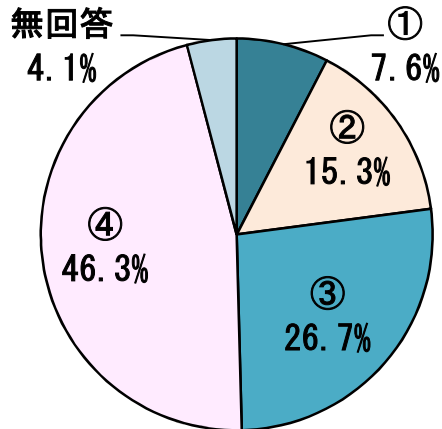
※ 「話すこと」の試験結果とのクロス。

4技能を通じた言語活動に関する生徒の取組状況

- 英語でスピーチやプレゼンテーションをした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思う」生徒(選択肢①②) の比率が高い (公立)

問 第2学年での英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

- ① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない



※ 「話すこと」の試験結果とのクロス。

外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠について

熟練した 言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができる。住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(出典) ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

「情報活用能力調査」について

調査の趣旨

- ① 児童生徒の情報活用能力の実態の把握, 学習指導の改善
- ② 次期学習指導要領改訂の検討のためのデータを収集

出題内容

- ・情報を収集・読み取り・整理・解釈する力
- ・受け手の状況などを踏まえて発信・伝達する力

} コンピュータ
を使用して調査

	情報活用能力調査		質問(紙)調査	
	実施の有無	調査方法 (調査時間)	実施の有無	調査方法
児童生徒	○	コンピュータ 小学校(16問/60分) 中学校(16問/68分)	○	コンピュータ
教員	—	—	○	質問紙
学校(校長)	—	—	○	質問紙

調査対象: 小学校第5学年(116校 3343人)・中学校第2学年(104校 3338人)
調査時期: 平成25年10月から平成26年1月

児童生徒の情報活用能力に関する傾向

小学生について、整理された情報を読み取ることはできるが複数のウェブページから目的に応じて、特定の情報を見つけ出し、関連付けることに課題がある。

また、情報を整理し、解釈することや受け手の状況に応じて情報発信することに課題がある。

中学生について、整理された情報を読み取ることはできるが、複数のウェブページから目的に応じて、特定の情報を見つけ出し、関連付けることに課題がある。

また、一覧表示された情報を整理・解釈することはできるが、複数ウェブページの情報を整理・解釈することや、受け手の状況に応じて情報発信することに課題がある。

	調査問題内容	通過率(%)
小学校	整理された複数の発言者の情報の正誤を読み取る問題	62.4
	複数のウェブページから情報を見つけ出し、関連付ける問題	9.7
	一覧表示された複数のカードにある情報を整理・解釈する問題	17.9
	2つのウェブページから共通している複数の情報を整理・解釈する問題	16.3
	プレゼンテーションソフトにて 画像を活用してスライドを作成する問題	33.3

	調査問題内容	通過率(%)
中学校	整理された複数の見学地の情報の共通点を読み取る問題	84.3
	複数のウェブページから情報を見つけ出し、関連付ける問題	43.7
	一覧表示された複数の情報を、提示された条件をもとに整理・解釈する問題	76.4
	複数のウェブページから目的に応じて情報を整理・解釈する問題	12.2
	プレゼンテーションソフトにて文字や画像を活用してスライドを作成する問題	39.1

「情報活用能力調査」について

児童生徒の情報活用能力に関する傾向

小学生については、自分に関する個人情報の保護について理解しているが、他人の写真をインターネット上に無断公表するなどの他人の情報の取扱いについての理解に課題がある。

中学生については、不正請求メールの危険性への対処についての理解に課題がある。

図表1-4 小学校 ブログ上での情報発信において
自他の情報の取扱いで問題のある点を選択する問題

情報の取扱いについて問題のある点	選択した者の割合(%)
個人情報(学校名, 学級名及び出席番号)の取扱い	73.0
他人の写った写真の取扱い(肖像権)	41.2
住所を教えて欲しいという見知らぬ他人からの書き込み	47.6

図表1-5 中学校 不正請求メールへの対応で不適切な項目を選択する問題

不適切な項目	選択した者の割合(%)
メールに返信する	50.4
入金後URLから退会手続きをする	43.9
問い合わせ先に電話して抗議する	38.5

上位の学校群の傾向

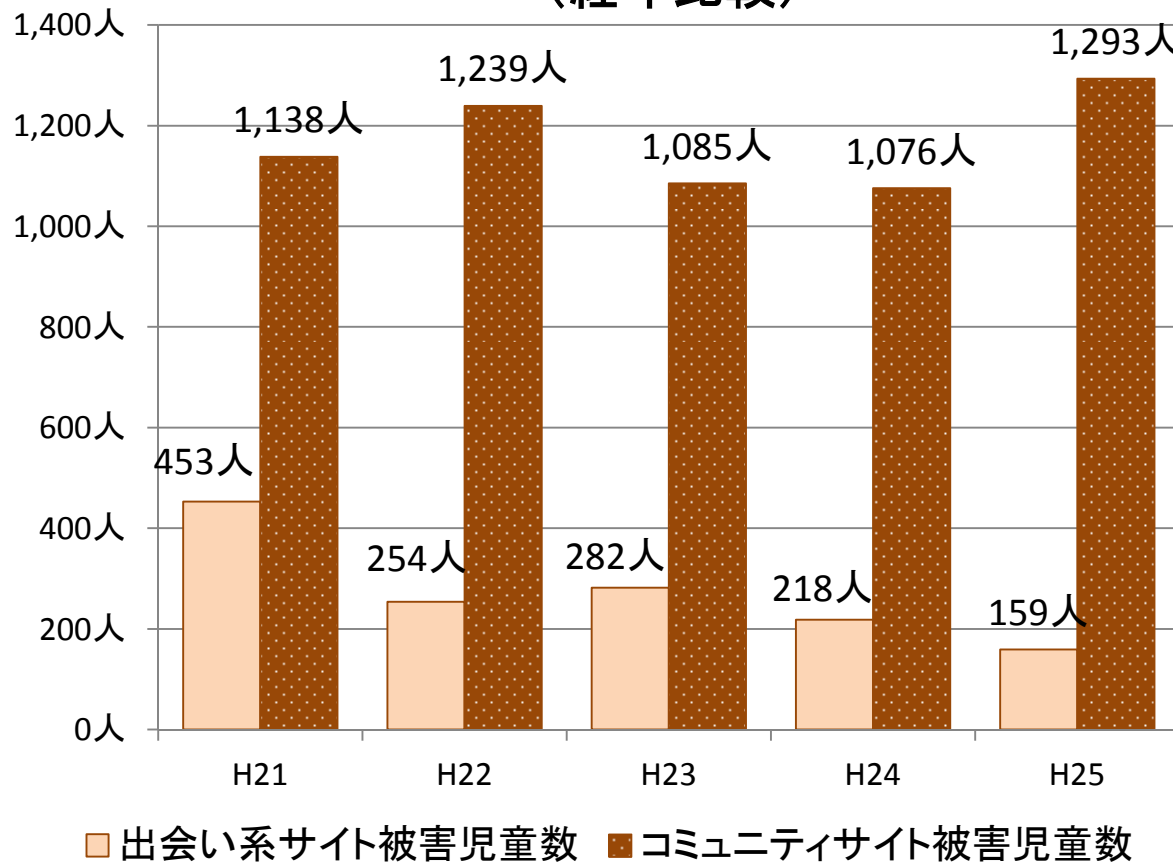
- ① 上位の学校群の教員は、下位の学校群と比べ、次のような授業の実施頻度が高い傾向にある。
 - ・児童生徒に自分の考えを表現させること
 - ・児童生徒に情報を整理させること
 - ・児童生徒に情報手段の特性に応じた伝達及び円滑なコミュニケーションを行わせること など
- ② 上位の学校群の児童生徒は、下位の学校群と比べ、学校で次のようなICT活用をしている頻度が高い傾向にある。
 - ・情報を収集すること
 - ・表やグラフを作成すること
 - ・発表するためのスライドや資料を作成すること。

「出会い系サイト」に関する事件等の被害者数

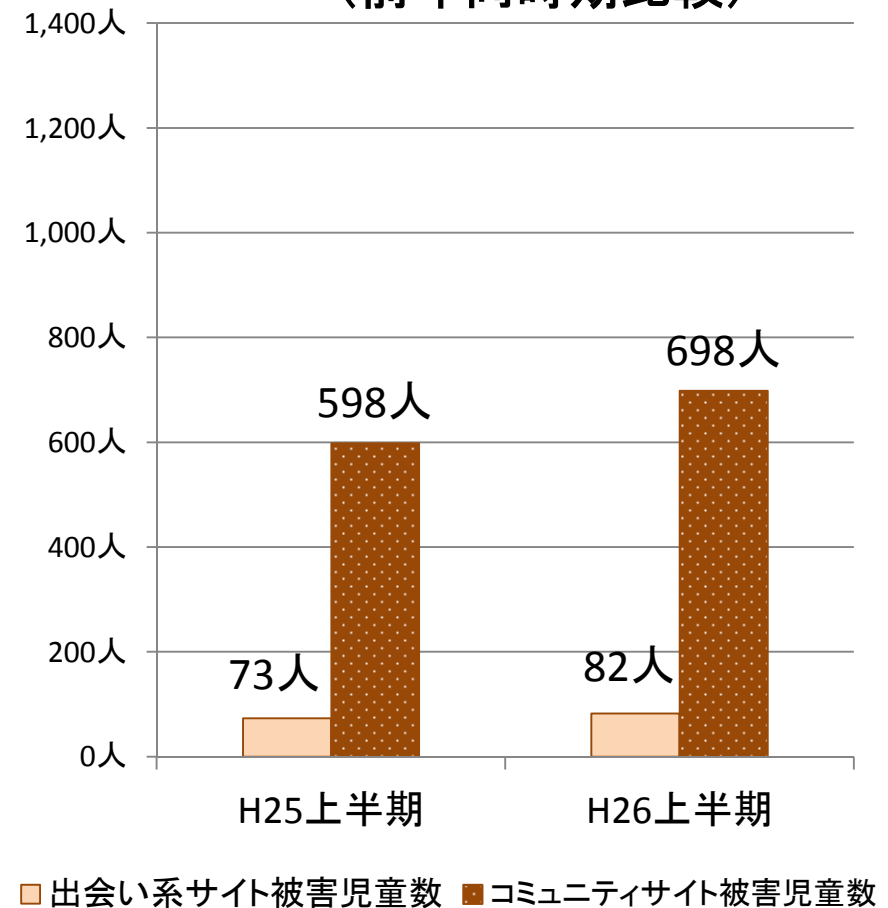
○「出会い系サイト」に起因して犯罪被害に遭った児童数は減少傾向にある。
(出会い系サイト規制法改正(平成20年)以降の取締りの強化等による。)

○コミュニティサイトに起因して犯罪被害に遭った児童数は減少傾向だったが、直近は増加傾向にある。
(無料通話アプリのIDを交換する掲示板に起因する犯罪被害による。)

(経年比較)



(前年同時期比較)



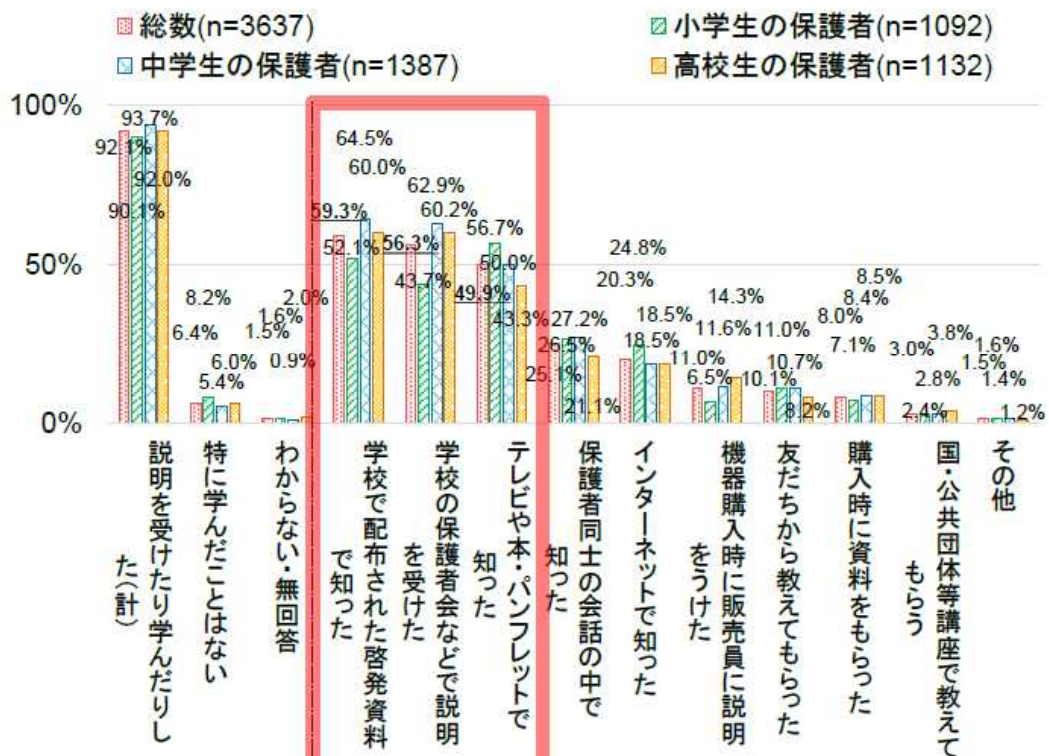
保護者のインターネットに関する啓発や学習の経験

○ 保護者のインターネットに関する啓発や学習の経験は、「学校で配布された啓発資料で知った」(59.3%)、「学校の保護者会などで説明を受けた」(56.3%)、「テレビや本・パンフレットで知った」(49.9%)が上位。

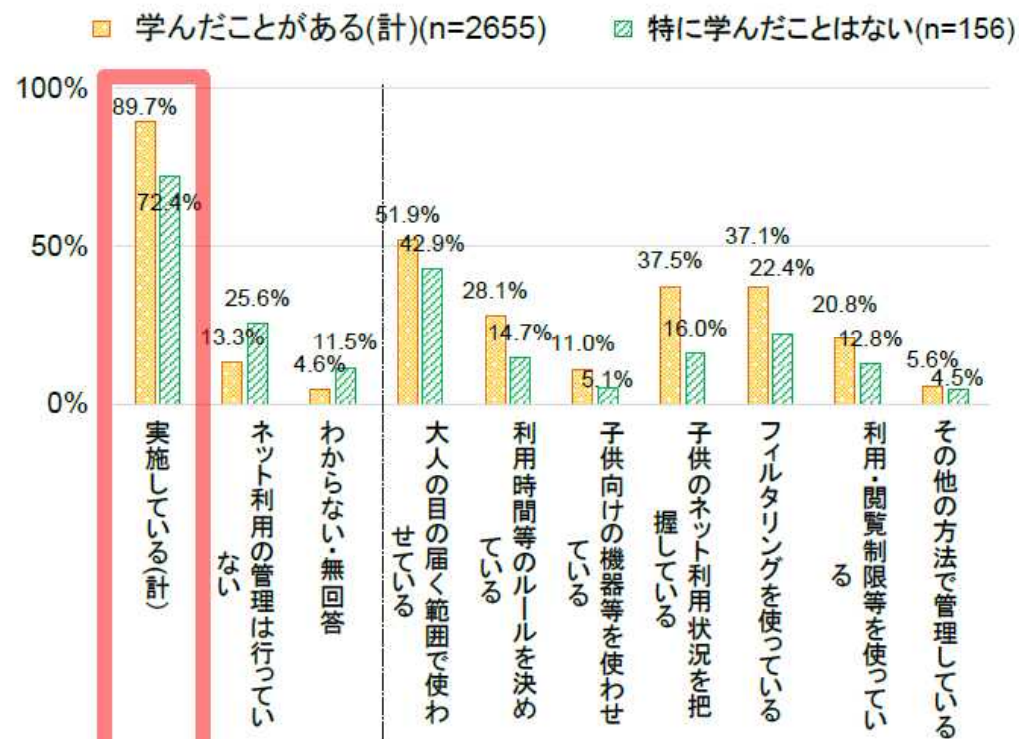
○ 青少年のインターネット利用に関する保護者の取組を「実施している(計)」との回答は、啓発や学習の経験のある保護者の方が高い。

保護者のインターネットに関する啓発や学習の経験

青少年のインターネット利用に関する保護者の取組【啓発経験の有無別】



(保護者調査Q16)



(保護者調査Q8)

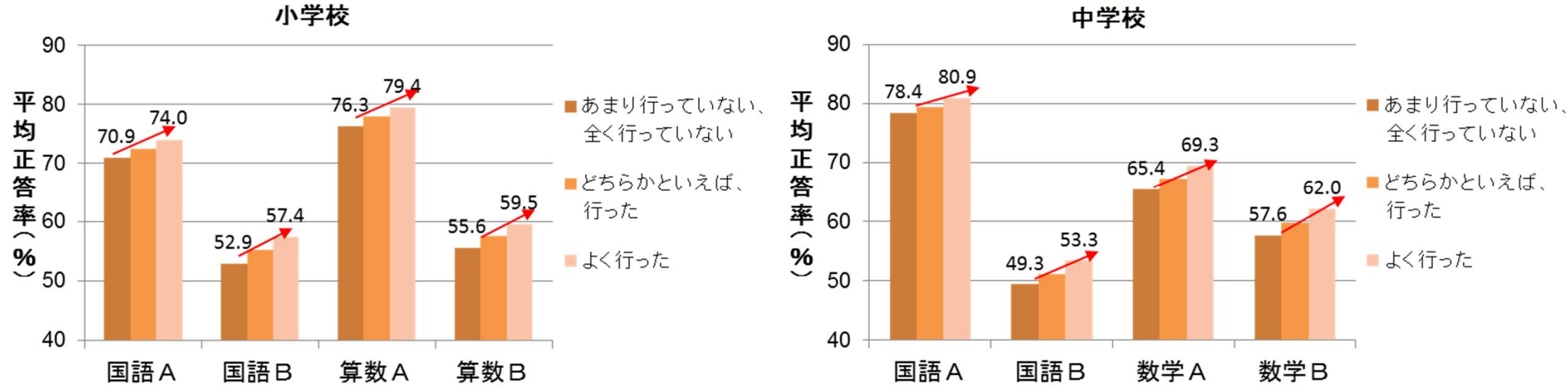
(注1) 「保護者のインターネットに関する啓発や学習の経験」の数値は、回答した保護者全員をベースに集計。

(注2) 「青少年のインターネット利用に関する保護者の取組【啓発経験の有無別】」の数値は、青少年がいずれかの機器(15機器)を利用して、インターネットを利用していると回答した保護者をベースに集計。

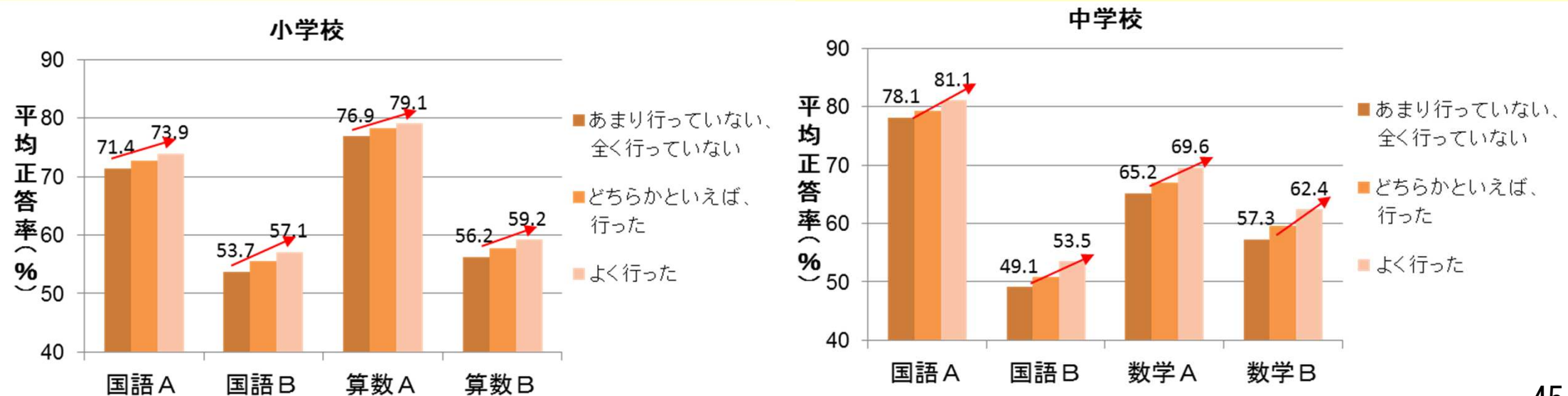
学校における指導状況と学力との関係 —全国学力・学習状況調査の結果から—

◆ 指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置づける学校や、総合的な学習の時間における探究活動を積極的に実施する学校ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。

【図表1】各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか【学校質問紙】



【図表2】総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしましたか【学校質問紙】

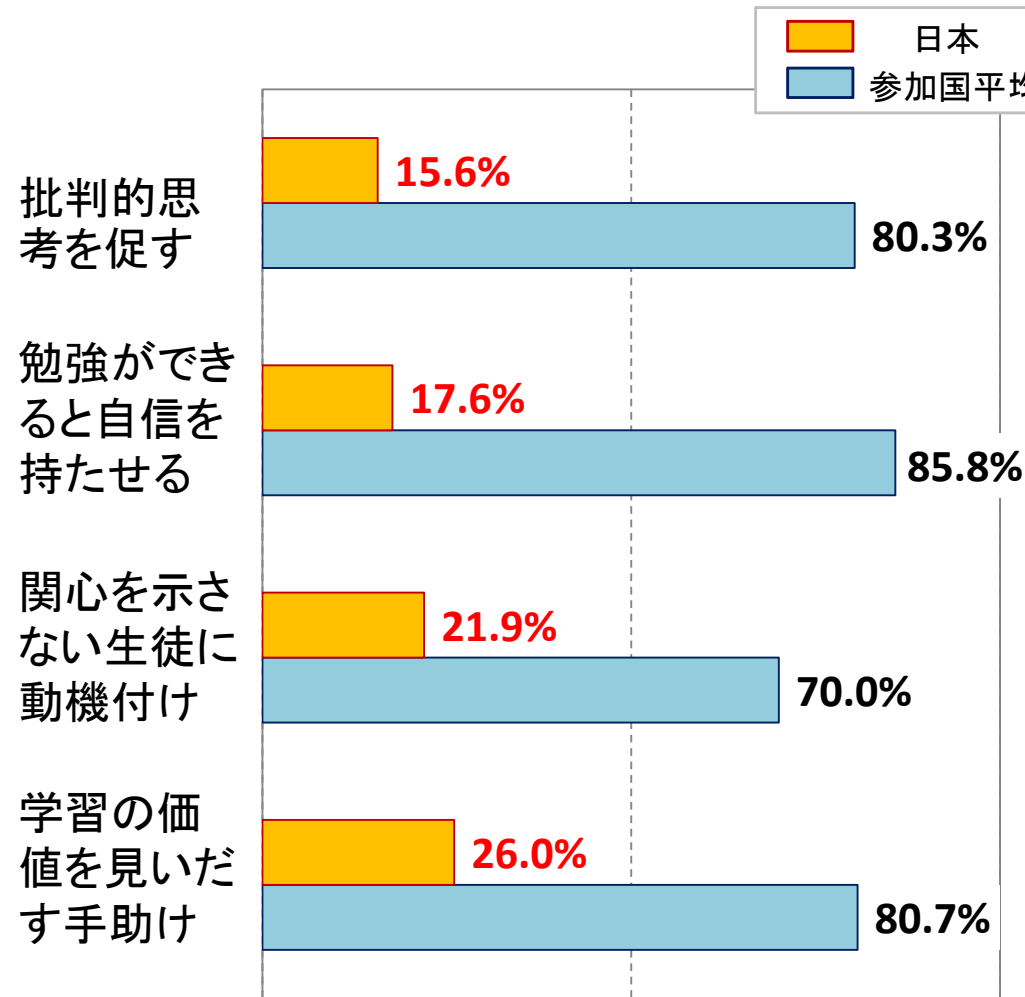


(出典) 文部科学省・国立教育政策研究所「平成26年度全国学力・学習状況調査の結果(概要)」

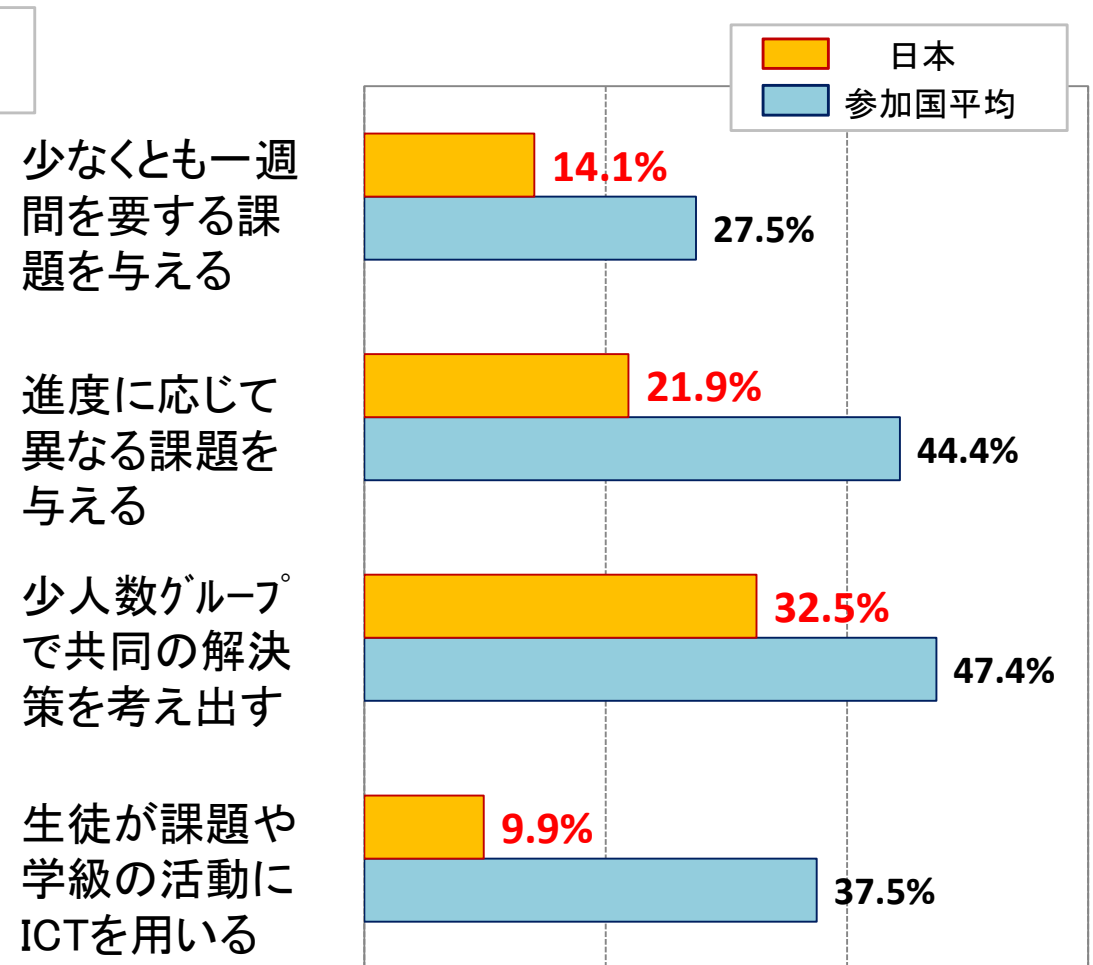
主体的な学びに関する問題 —OECD国際教員指導環境調査 (TALIS) から—

◆教員は主体的な学びを重要と考えている一方、主体的な学びを引き出すことに対しての自信が低く、ICTの活用を含め多様な指導実践の実施割合は低い。

主体的な学びの引き出しに自信を持つ
教員の割合



各指導実践を頻繁に行っている
教員の割合

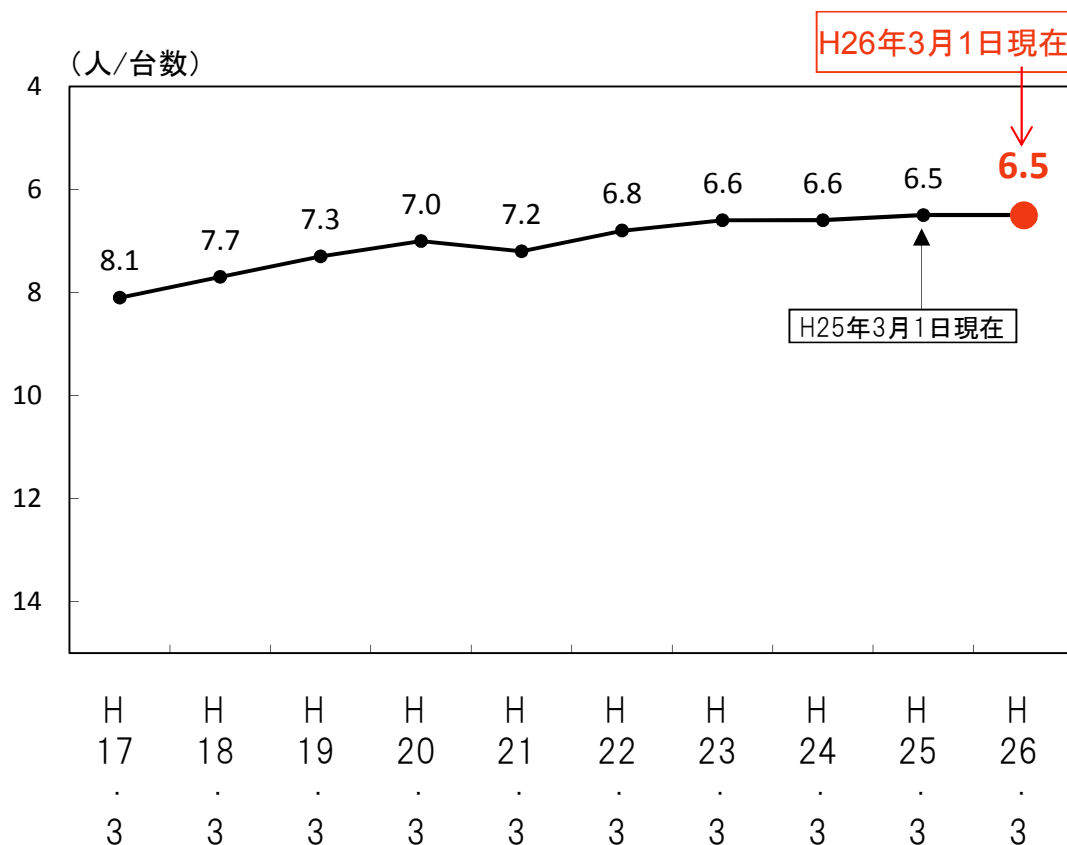


(出典) OECD国際教員指導環境調査 (TALIS) 2013 結果概要

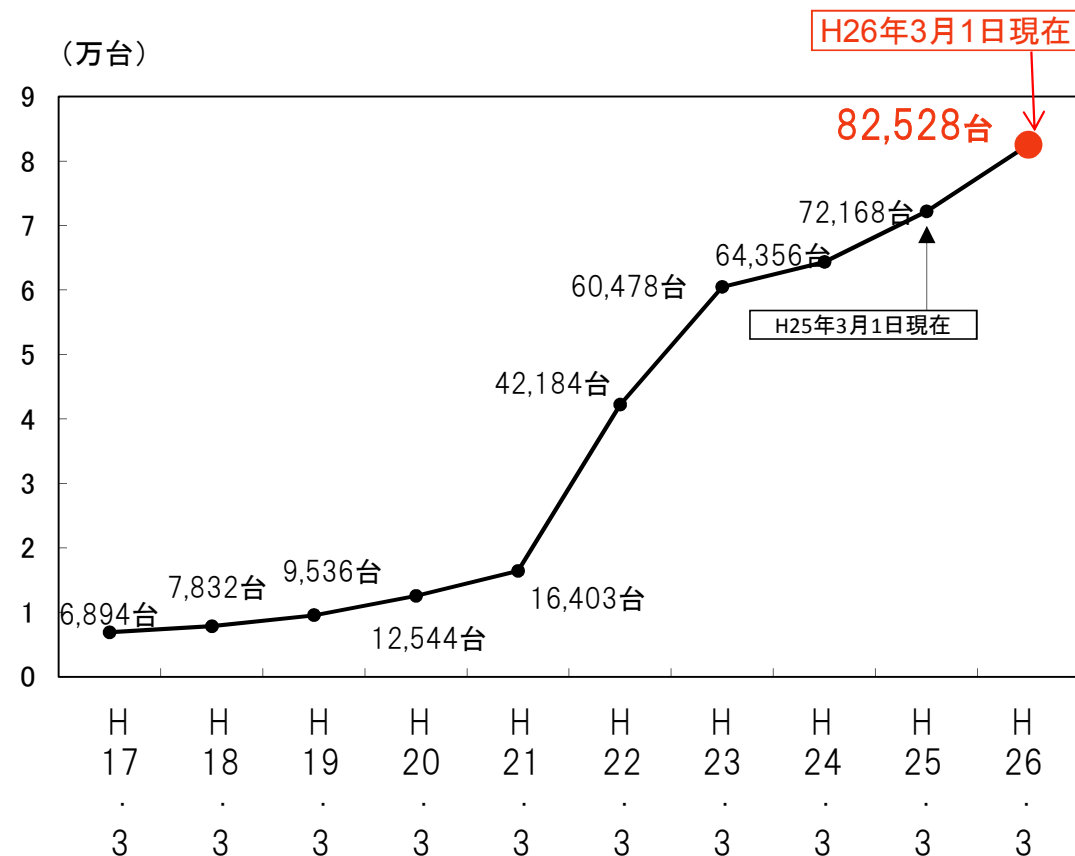
学校におけるICT環境の整備状況の推移

◆教育用コンピュータ1台あたりの児童生徒数はここ数年は横ばい。電子黒板の導入台数は年々増加している。

①教育用コンピュータ1台あたりの児童生徒数



②電子黒板の整備状況

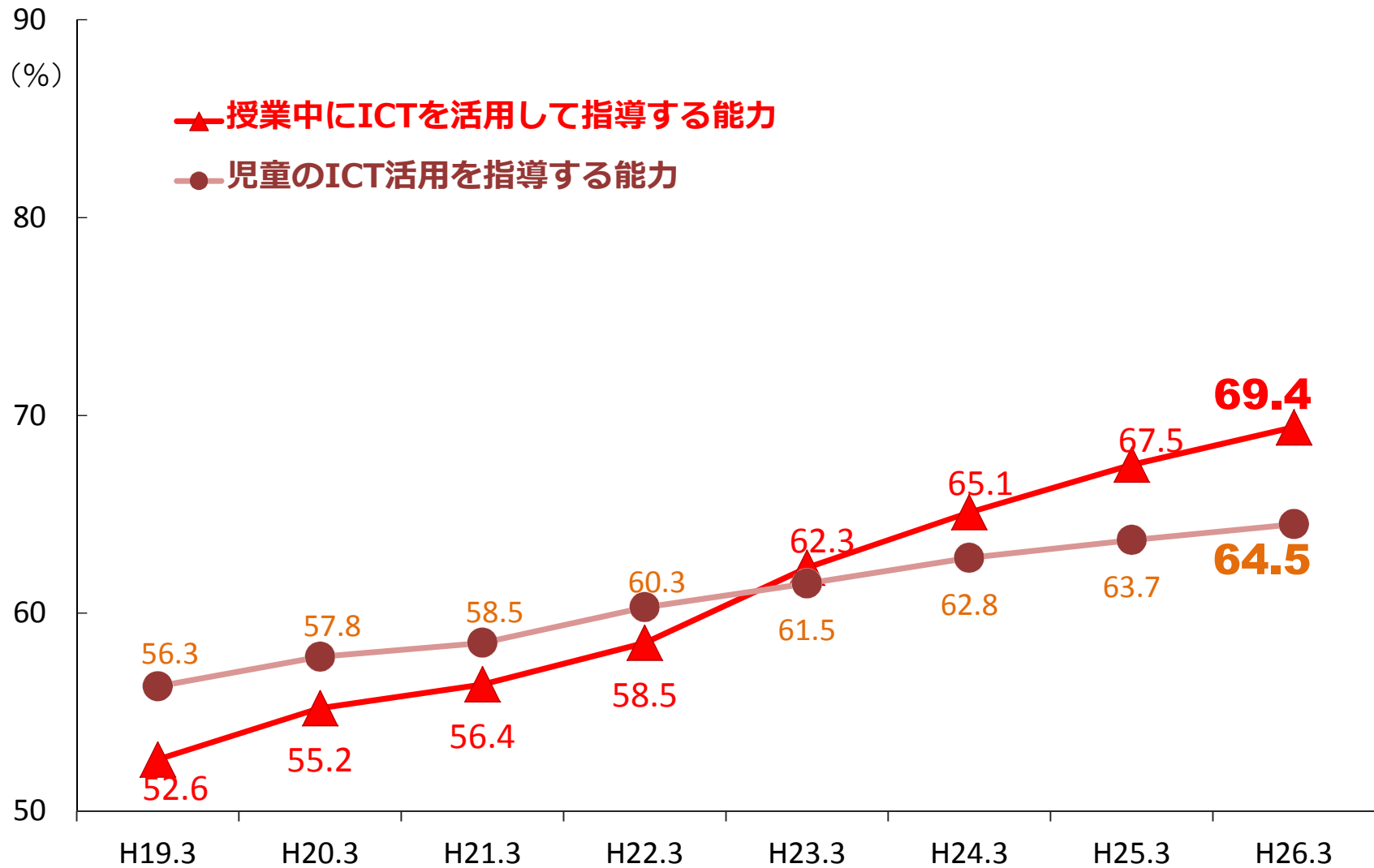


前年度と比較して10,360台増加

(出典) 文部科学省「平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査」(平成26年3月現在)

教員のICT活用指導力の推移

◆授業中にICTを活用した指導、児童のICT活用を指導できる教員の割合は増えているが、未だ十分であるとは言えない状況。



※教員のICT活用指導力チェックリストで「わりにはできる」若しくは「ややできる」と回答した教員の割合の平均

(出典) 文部科学省「平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査」(平成26年3月現在)

学校運営に関する組織的な取組について —全国学力・学習状況調査結果から—

◆教科の平均正答率の高い学校の方が「学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的によく取り組んでいる」と回答している割合が高い傾向。

【問】学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか。【学校質問紙】

小学校

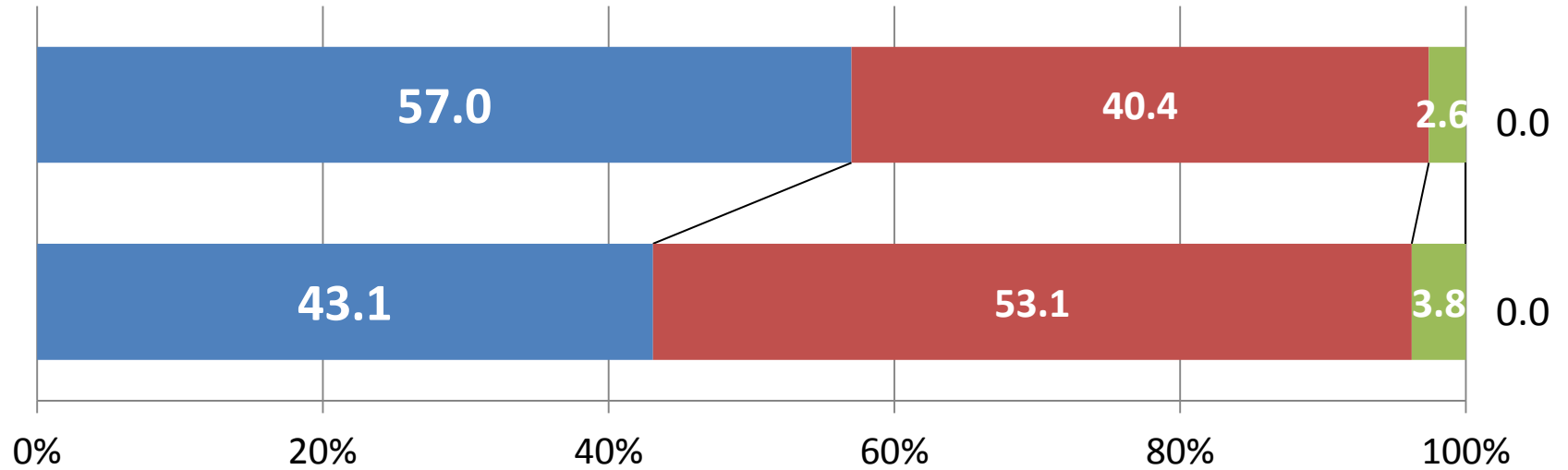
【A群】

全教科で平均正答率が5ポイント以上
全国平均を上回る学校

【B群】

全教科で平均正答率が5ポイント以上
全国平均を下回る学校

■よくしている ■どちらかといえば、している ■あまりしていない ■全くしていない



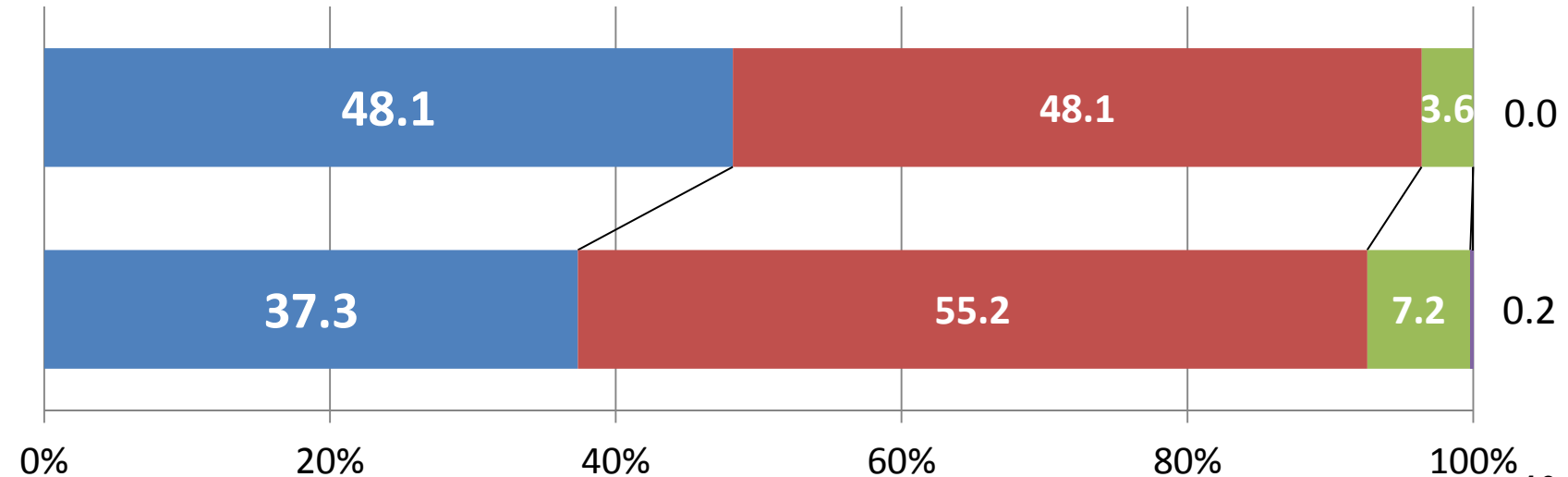
中学校

【A群】

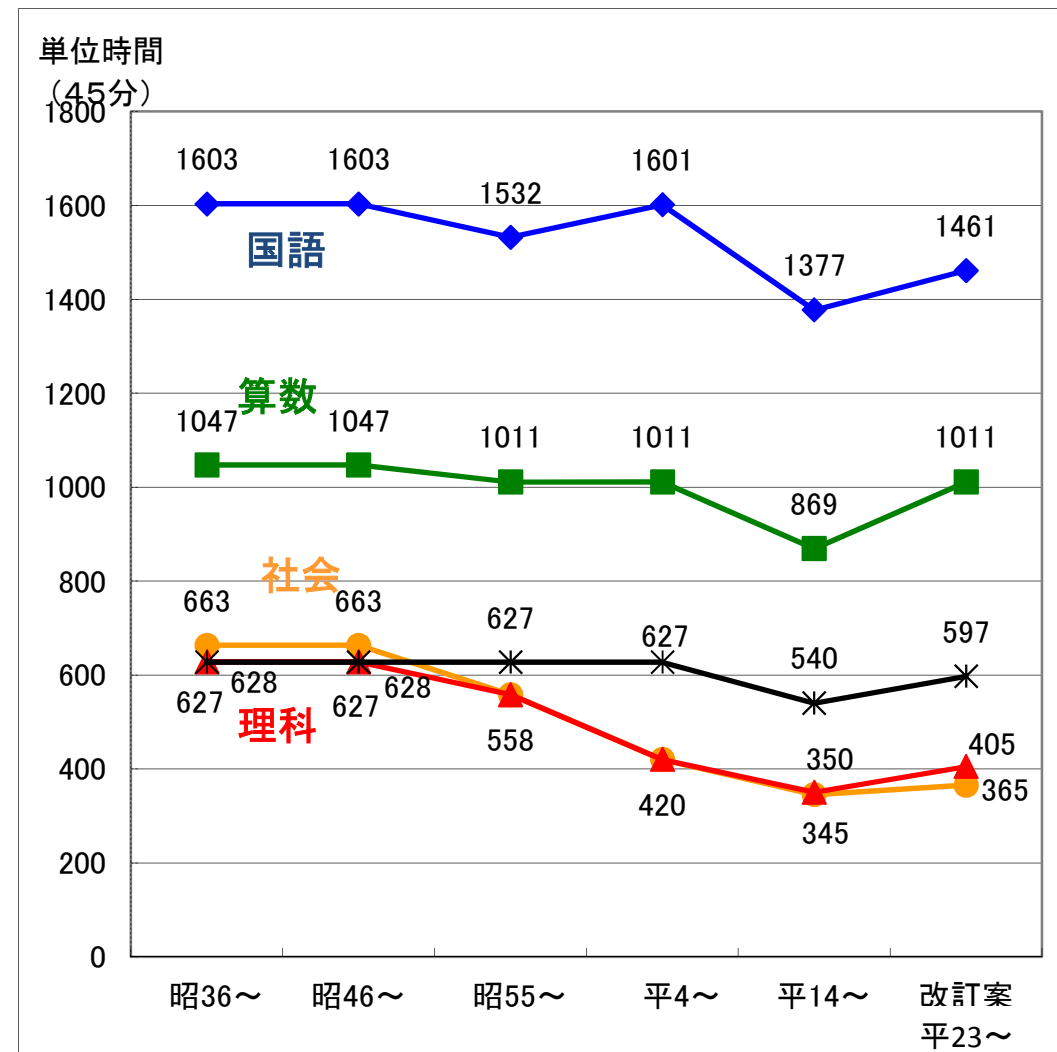
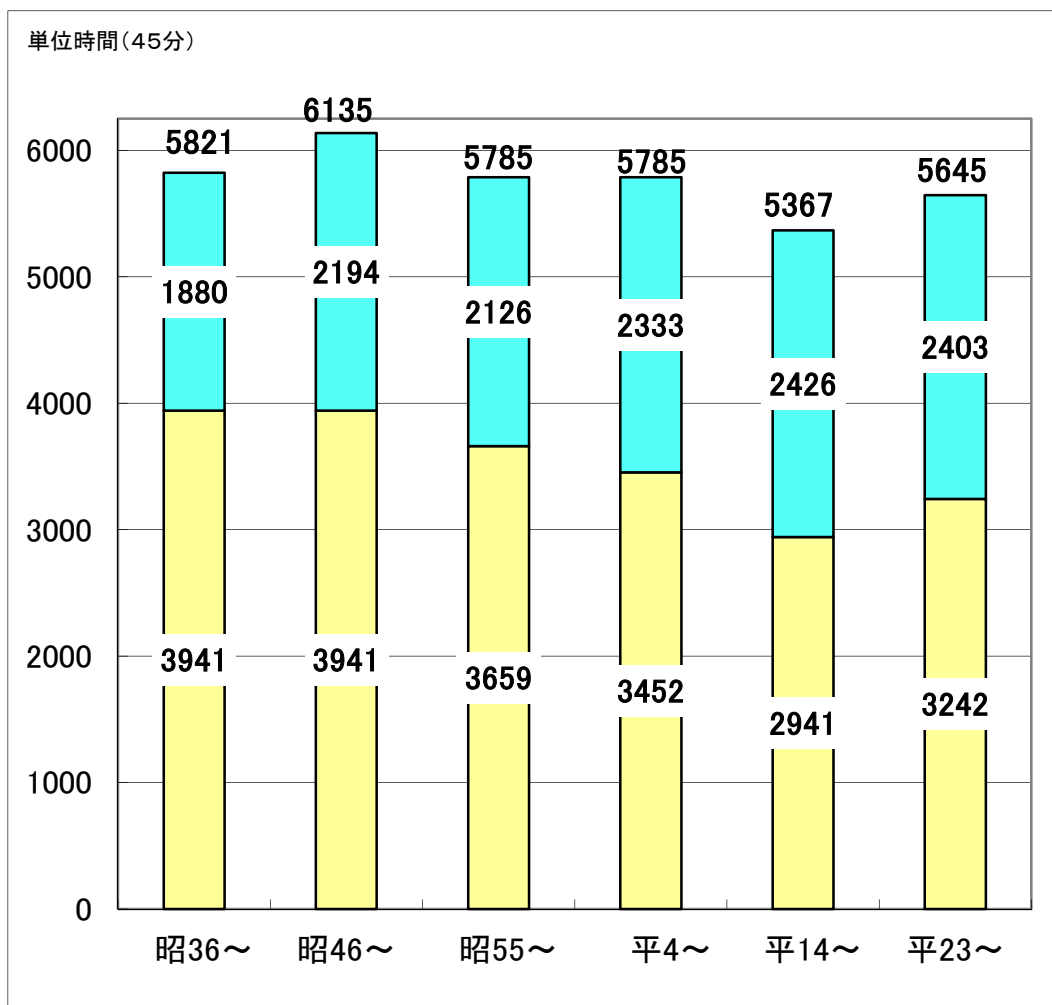
全教科で平均正答率が5ポイント以上
全国平均を上回る学校

【B群】

全教科で平均正答率が5ポイント以上
全国平均を下回る学校



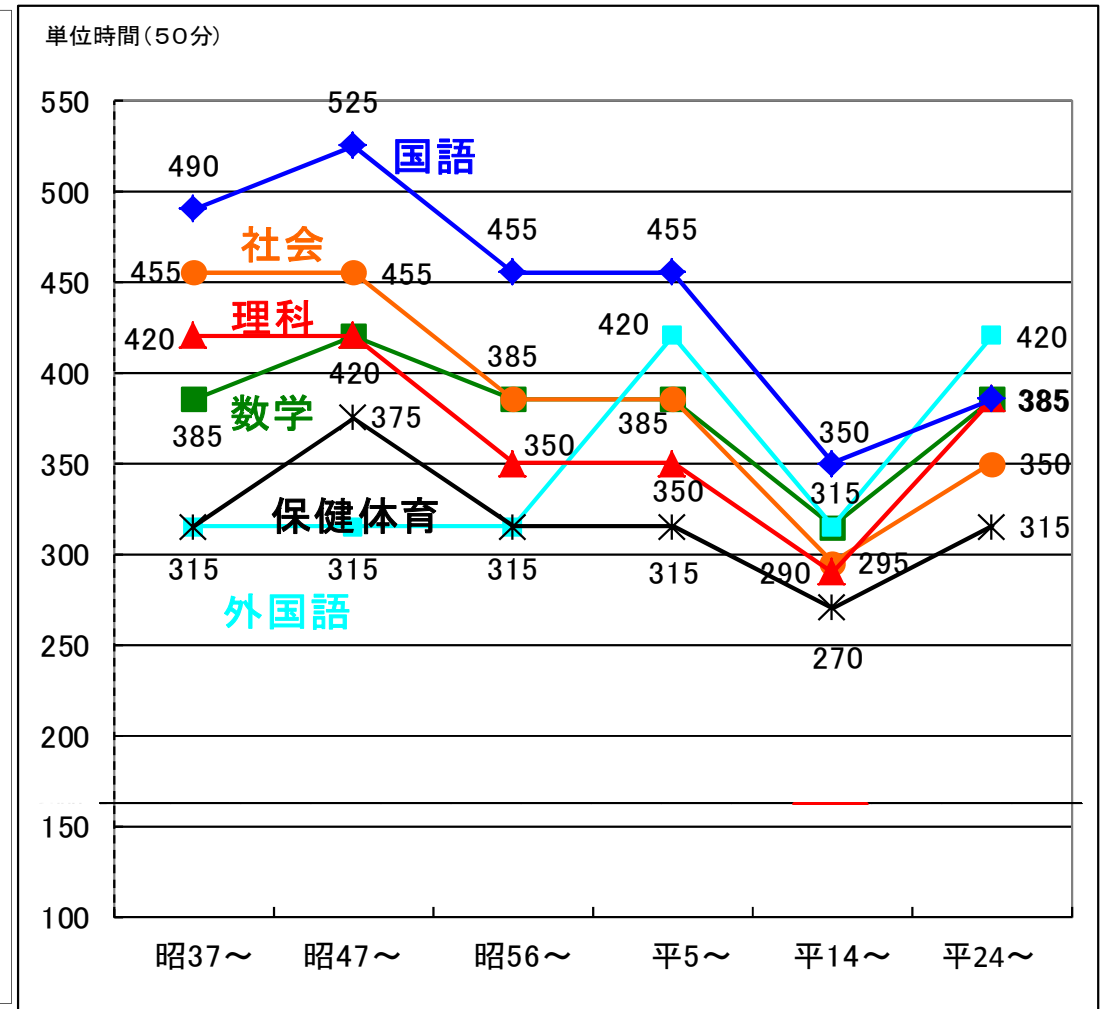
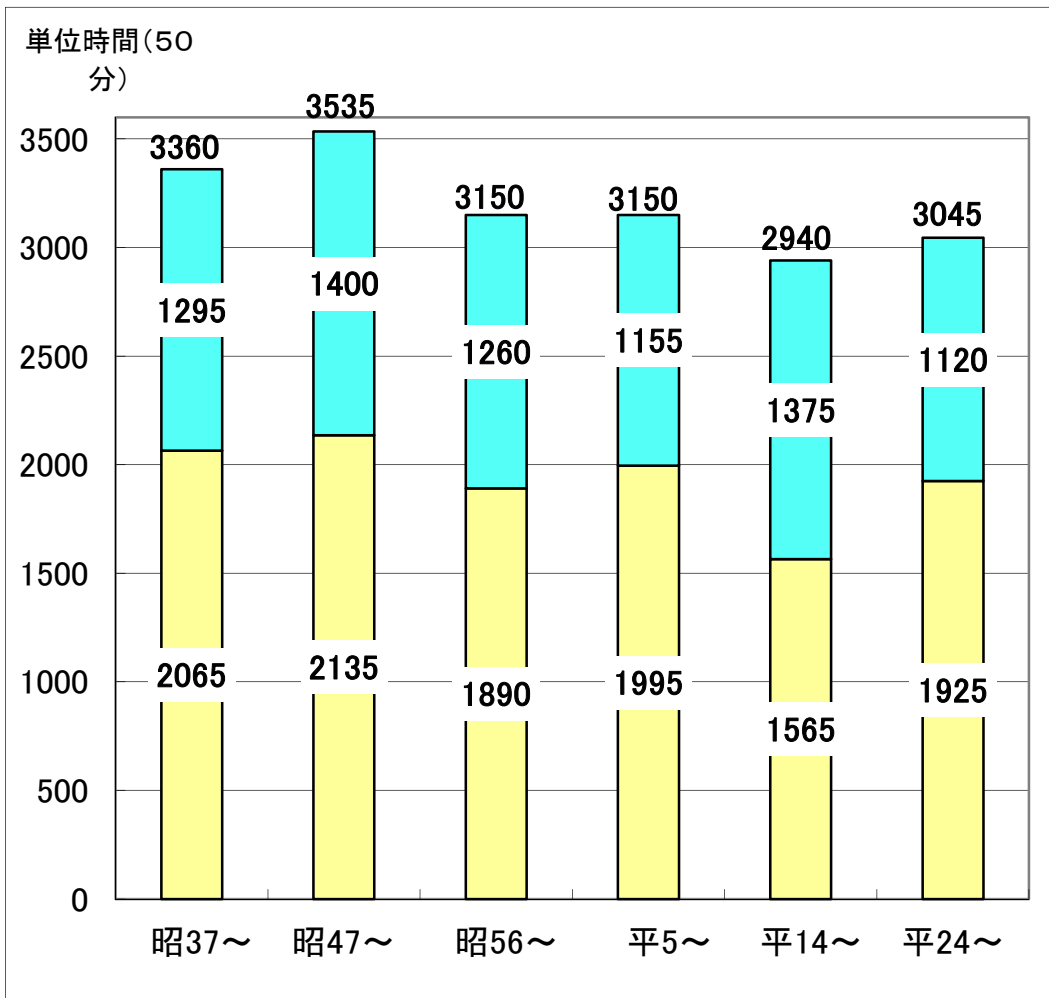
小学校授業時数の推移



- : 国語, 社会, 算数, 理科の授業時数の合計
- : 上記以外の教科等の授業時数の合計

※昭和46年度実施のグラフについては、当時、特別活動の授業時数は規定されていなかったものの、学習指導要領において特別活動の一部に充てること
が望ましいとされていた時数を加えたものを総授業時数としている。

中学校授業時数の推移



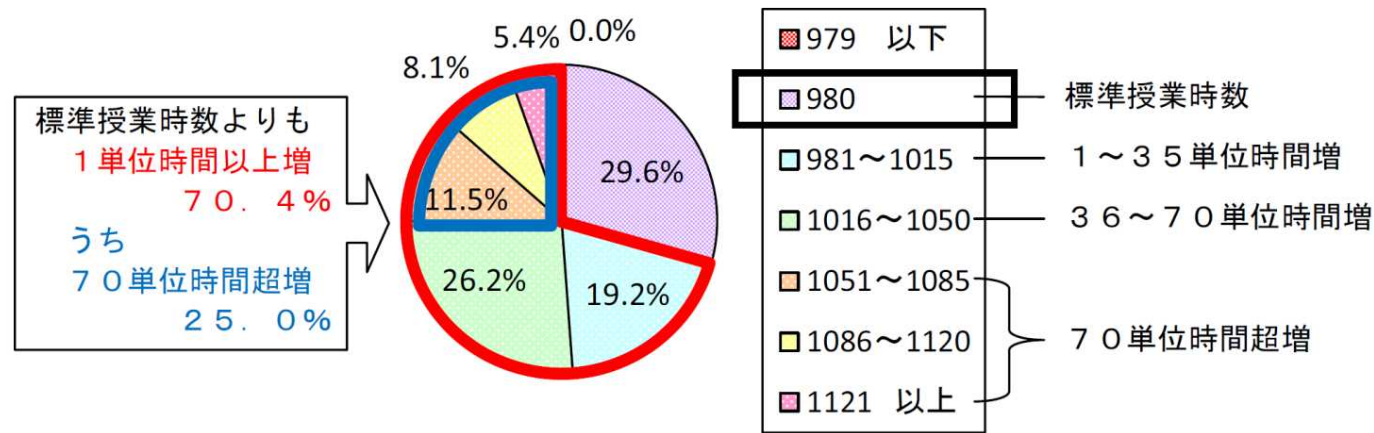
- : 国語, 社会, 数学, 理科, 外国語の授業時数の合計
- : 上記以外の教科等の授業時数の合計

年間総授業時数(単位時間)の設定状況

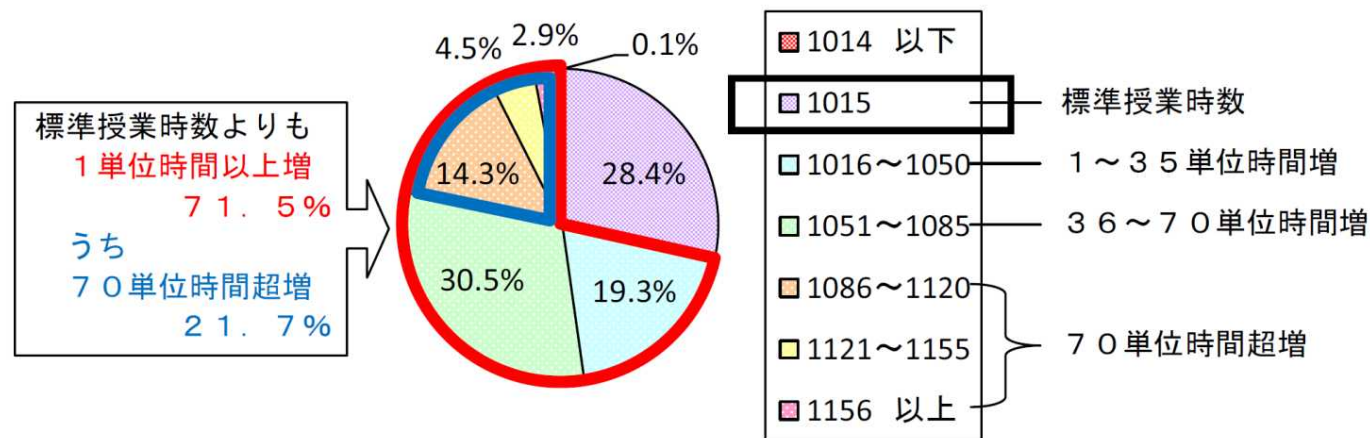
(1単位時間は小学校で45分、中学校で50分)

(例)

<小学校第5学年>



<中学校第1学年>

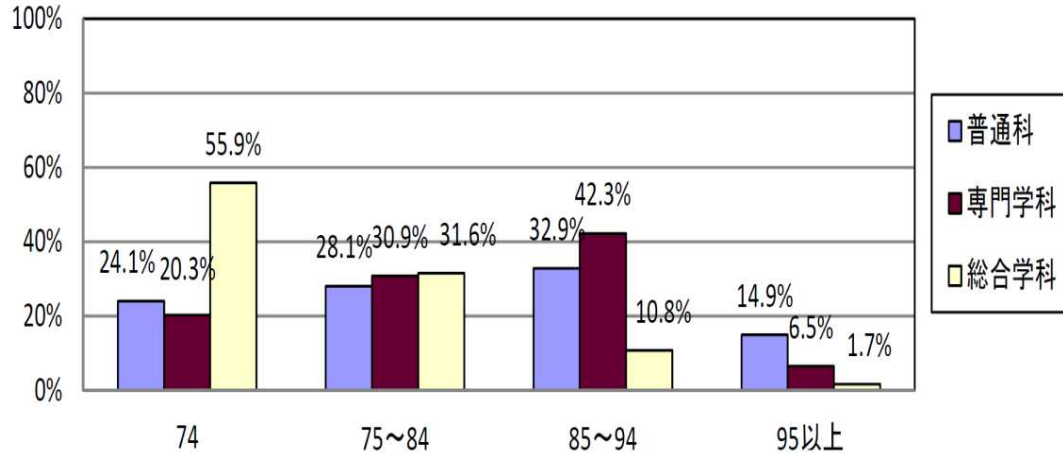


平成25年度 教育課程編成・実施状況調査より

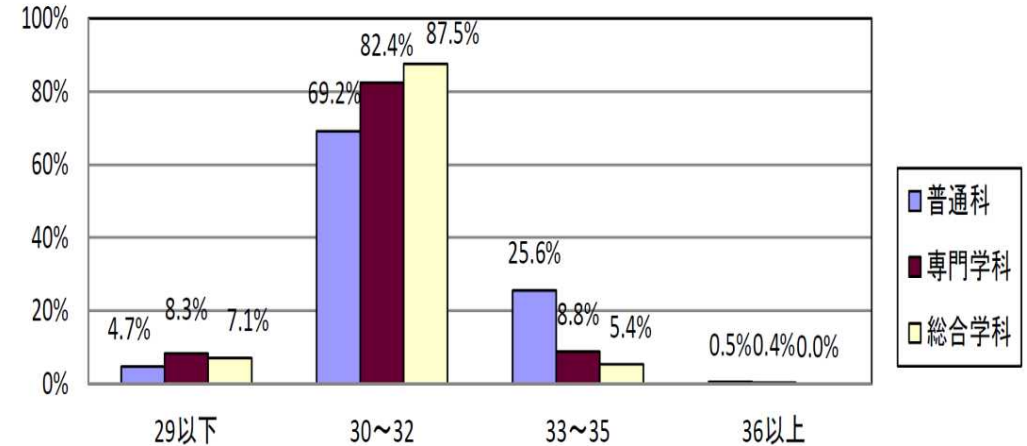
各学校における教育課程の編成状況（公立高等学校）

卒業に必要な修得単位数（H25年度 全日制）

平成25年度 全日制

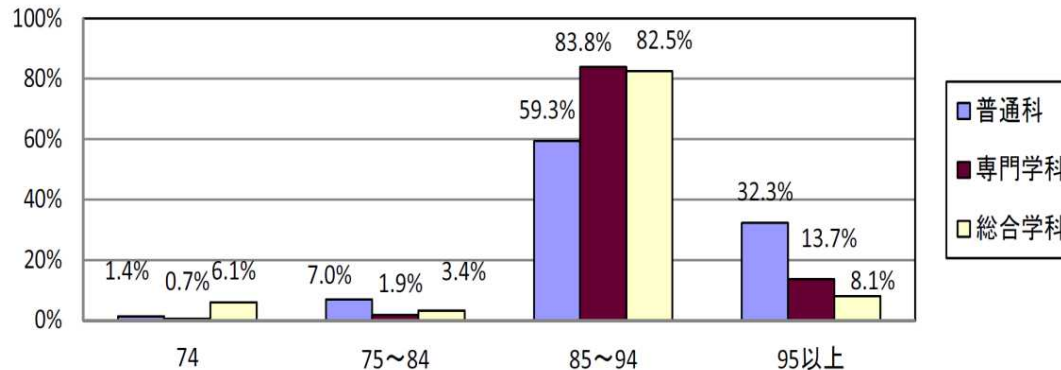


1週間の授業時数（単位時間）（H25年度 全日制）



卒業までに習得させる単位数（H25年度 全日制）

平成25年度 全日制



校長は、生徒の高等学校の全課程の修了を認めるに当たっては、高等学校学習指導要領の定めるところにより、七十四単位以上を習得した者について行わなければならない。

（学校教育法施行規則 第96条）

全日制の課程における週当たりの授業時数は、30単位時間を標準とする。ただし、必要がある場合には、これを増加することができる。

（学習指導要領総則第4款の2）